

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第 5 号

2 0 1 9

岐阜県文化財保護センター

目 次

美濃の一石五輪塔

.....小野木学 1

岐阜県塚奥山遺跡の線刻絵画土器とその周辺

.....三輪晃三 25

美濃の一石五輪塔

小野木 学

はじめに

一石五輪塔は、中世後期以降に畿内を中心とする広い範囲で多用された石塔である。岐阜県では美濃地方（以下、「美濃」と記す。）の南西部を中心とする範囲に分布しており、筆者らはかつてそれらを実測し、中世葬送墓制研究会で概要を発表した（小野木他 2017）。その発表資料では、一石五輪塔の分布と紀年銘の年代順に配置した実測図を提示したが、一石五輪塔が所在する寺院等の史的背景や近世初頭の一石五輪塔について言及できなかつたこと、実測図の縮尺が小さく石塔の詳細が分かりにくいことなどが課題として残った。そこで、小稿では研究会後に筆者が実見・実測した一石五輪塔を加え、美濃における中世から近世前半（17世紀代）までの一石五輪塔の分布とこれまで実測した一石五輪塔の詳細を記載し、属性分類に基づく編年を提示する。

1 分布と石材

美濃における中世から近世前半の一石五輪塔は、主に美濃南西部とその周縁に分布する（図1）。美濃南西部を中心とする地形は、主に羽島市や大垣市などが位置する自然堤防地帯と、海津市が位置する三角州地帯があり、その周縁には垂井町や大野町、本巣市、岐阜市などが位置する扇状地帯と、各務原市が位置する各務原台地、関市が位置する関盆地などがある。さらに、それらを囲むように、南西部に養老・鈴鹿山地、北西部に美濃山地、関盆地の北側に美濃高地が広がる（国土庁土地局 1975）。このうち、一石五輪塔の分布は、自然堤防帯と扇状地帯に多く、その周辺の山地・高地帯等に散在する。特に一石五輪塔が狭い範囲にまとまって分布する地域は、養老町、垂井町、池田町、揖斐川町、大野町、本巣市、岐阜市などの扇状地帯であり、自然堤防地帯と三角州地帯を囲むように分

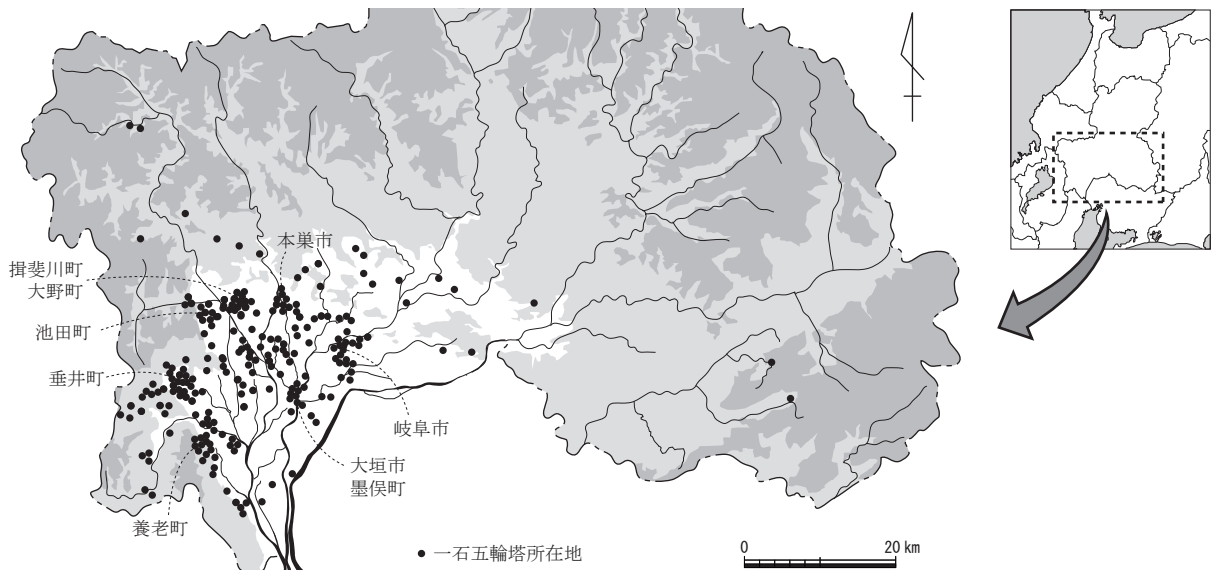


図1 一石五輪塔分布図（平成30年10月現在）

布している。また、自然堤防地帯でも大垣市墨俣町では分布が密である¹⁾。

一石五輪塔の石材は砂岩と花崗岩が多用され、その他にいわゆる笏谷石と呼ばれる福井県産の凝灰岩や石材が特定できないものがある²⁾。このうち、砂岩製の一石五輪塔が最も多い。

美濃の砂岩は、濃尾平野周縁部の山地・高地帯と、福井県や飛騨地方の境界付近の表層に確認されている(国土庁土地局 1975)。その多くは強堅な岩石で碎石原材として最適であり、一般に塊状無層理で、中～細粒で泥質岩のパッチを含むものが多いとされる。岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中5段階の「かたい(e5)」で硬砂岩に分類される(岐阜県企画部土地対策課 1986)。一方、東濃地域に広く分布する凝灰質砂岩の岩片・岩体のかたさは、「ややかたい(d3～d4)」である(図2上)。砂岩製一石五輪塔は、主に平野部周縁の表層砂岩帯の内側に分布しており、岐阜市より東側の分布は希薄である。また、一石五輪塔の使用石材の大半は硬砂岩であり、凝灰質砂岩は少ない。

一方、美濃の花崗岩は、主に東濃地域の恵那市や中津川市、西濃地域の揖斐郡揖斐川町貝月山周辺

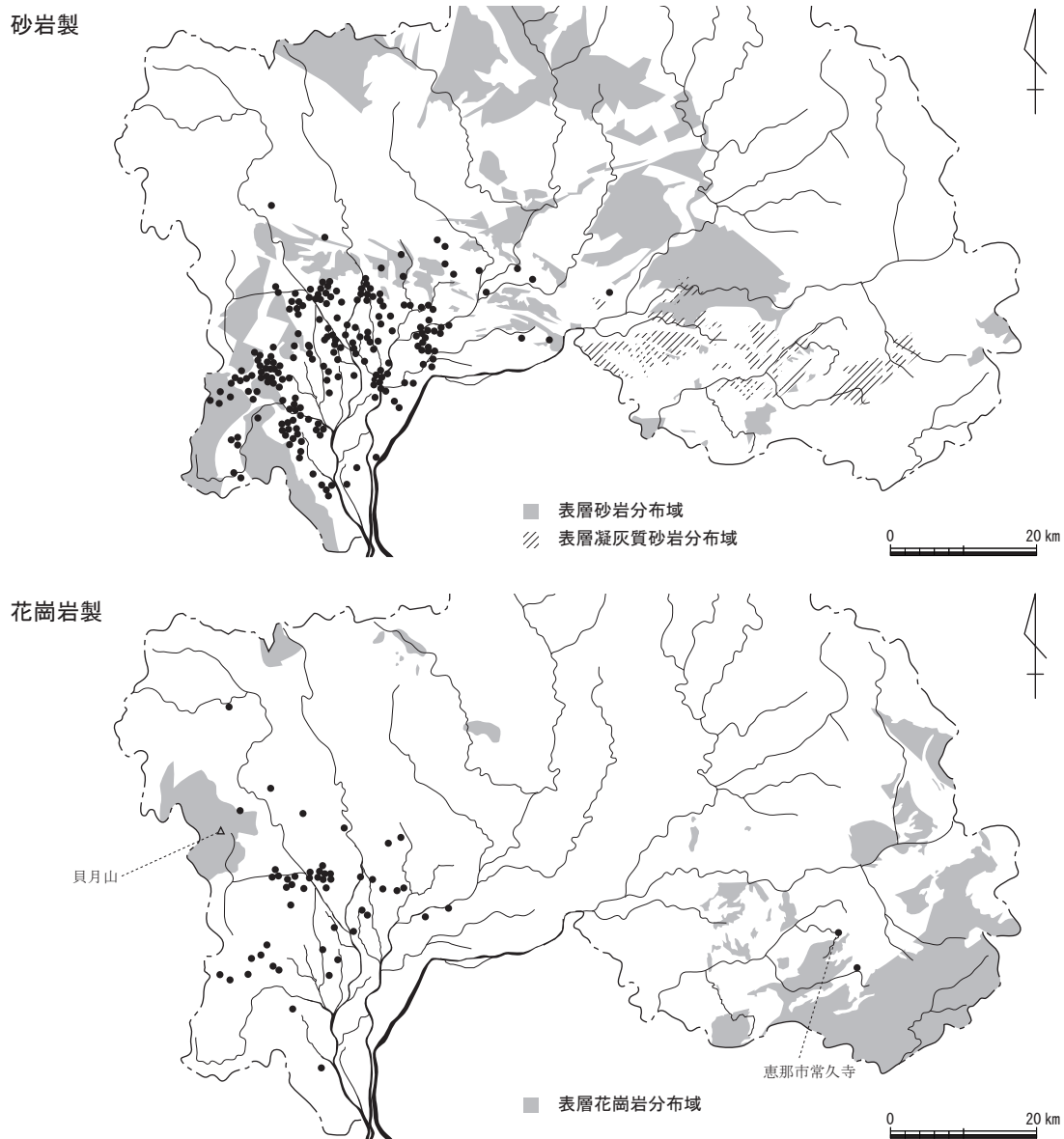


図2 石材別一石五輪塔分布図(平成30年10月現在)

などの表層に確認されている（図2下）（国土庁土地局1975）。このうち、最も広く確認されているのは東濃地域であるが、この地域における近世前半までの一石五輪塔の造立数は少ない。しかも、東濃地域の恵那市常久寺の一石五輪塔は「西三河型式の岡崎産花崗岩製品に含まれる可能性が高い」とされており、西三河型式の宝篋印塔とともに搬入したと考えられている（松井・溝口2010）。一方、その他の花崗岩製一石五輪塔は、揖斐川町貝月山付近を流れる河川の下流域にあたる揖斐川町から大野町にかけて高い密度で分布している。貝月山周辺の花崗岩の岩片・岩体のかたさは、いずれも6段階中6段階の「はなはだかたい（f6）」であるが、風化が進んだところは「マサ」化し（岐阜県企画部土地対策課1995）、現存している石塔の多くも粒状化している。

その他の石材として、福井県産の凝灰岩（笏谷石）がある。美濃では、これまで山県市南泉寺、関ヶ原町松尾山麓廃寺、同町自鏡寺の3箇所を確認しているが、今後、西濃地域を中心に確認数が増加する可能性がある。なお、これらはいずれも近世の一石五輪塔であり、南泉寺の一石五輪塔の銘文には「寛永三年」（1626年）の年号が刻まれている。

2 砂岩製一石五輪塔

次に、美濃で最も多く確認できる砂岩製一石五輪塔の詳細について記載する。掲載した実測図は紀年銘を有する資料を選択して現地で作成し、台座が確認できた場合はそれも図化した。なお、表1には実測図を掲載した一石五輪塔と台座の大きさや銘文等を示し、銘文の記載は、『日本石造物辞典』（日本石造物辞典編集委員会2012）を参考とした³⁾。

(1) 形式分類

一石五輪塔は、原則として長期間にわたり立った状態を維持することを前提として製作されるため、その機能を考える上で地輪の据え方が重要となる。そのため、既存の研究（元興寺文化財研究所1982、北野隆亮2017など）を参考とし、地輪の構造の違いによって、埋込式、安置式、柄式の3形式に分類した（図3）。

また、その基準を以下のとおりとした。

- ・埋込式：地輪側面下方に粗作り⁴⁾の加工痕が残り、底面に凹凸がみられ、原則として自立しないもの。
- ・安置式：地輪側面下方が平滑に成形され、底面が平坦であり（若しくはわずかに窪んでおり）、原則として自立するもの。
- ・柄式：有柄であり、柄穴のある台座と組み合わせるもの。

美濃におけるこれらの出現時期は、およそ埋込式が15世紀中葉から後葉、安置式が15世紀後葉、柄式が16世紀前葉以降であり、16世紀末までは埋込式と柄式が多く、17世紀以降は安置式が多い。

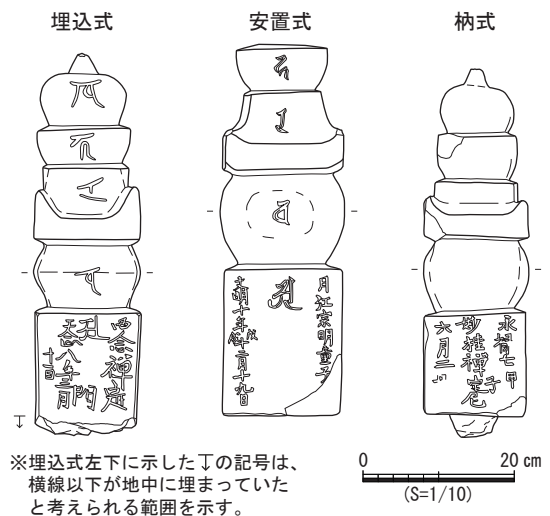


図3 一石五輪塔分類図

(2) 一石五輪塔の詳細

祖宝寺跡（不破郡関ヶ原町今須）

祖宝寺跡は真言宗の寺院であり、永正9（1512）年には複数の坊舎が存在していたとされ、明治時代以降に廃寺となった（関ヶ原町1992）。当地には祖父谷の東岸に石積みを伴う複数の平坦面が認められ、西岸の山麓に宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられている。そのうち、一石五輪塔5基を図示した（図4・5）。

1～5は、いずれも17世紀代の一石五輪塔で、安置式である。1は高さ90.6cmの大型塔であり、地輪高は36.9cmで全体の3分の1以上を測る。水輪は側辺が直線的で、上下のくびれは深い。また、その横断面形は方形を呈する。火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒端は垂直で、地輪と水輪の側辺と同一ライン上に位置する。火輪の屋根は低く、隅棟上端は風輪下方まで延びている。風輪は扁平で、その側辺はわずかに内傾している。空輪は肥大化しており、下方のくびれが深く、最大径は中央付近に位置する。2は水輪の中央部が突出し、その横断面形は隅丸方形を呈する。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって強く反り上がる。また、火輪上面は隅丸

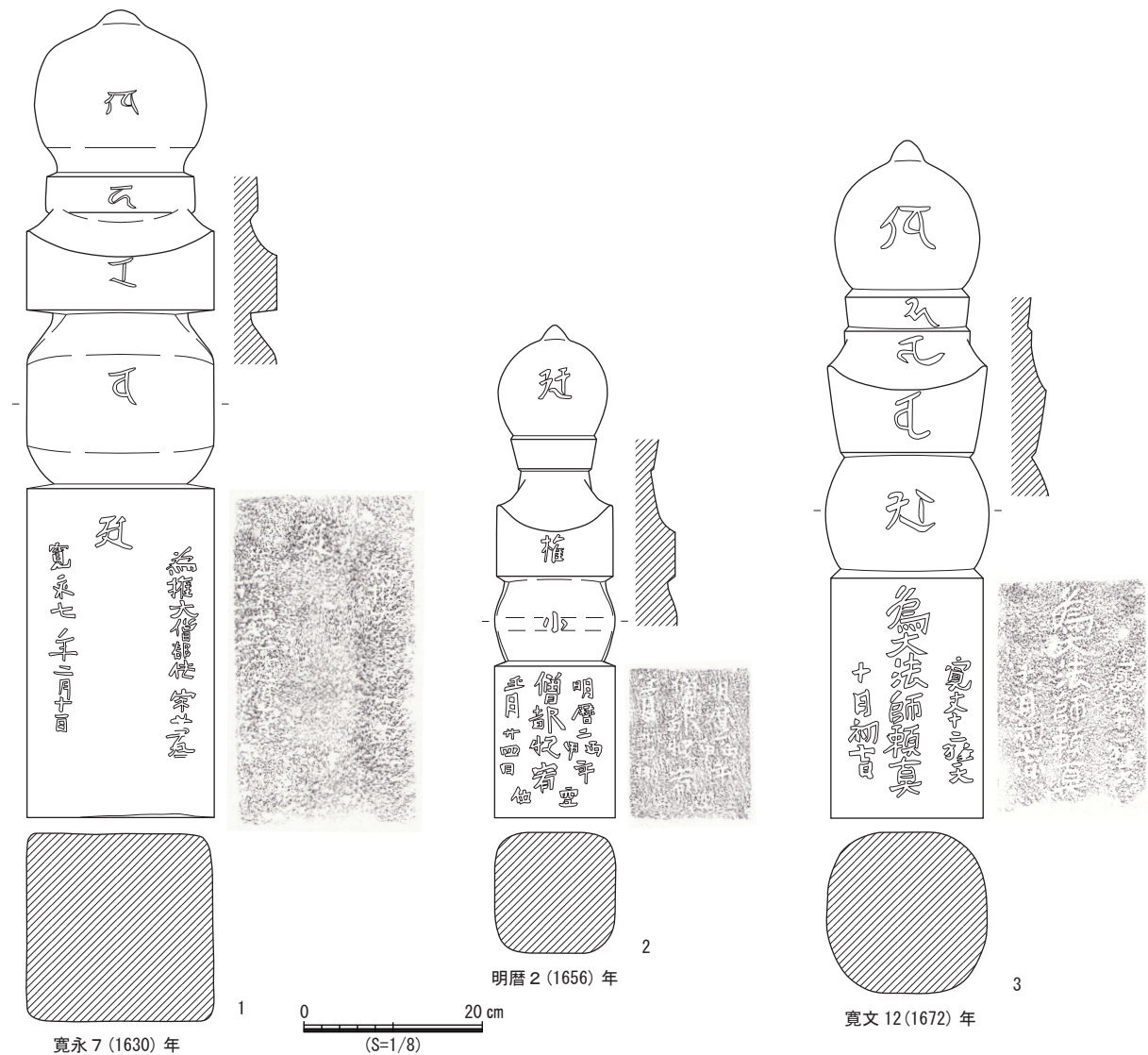


図4 祖宝寺跡石塔実測図（1）

方形を呈し、隅棟の稜線が火輪の上端まで延びていない。風輪は扁平で、その側辺は外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が大きい。空輪の最大径は中央付近に位置する。3は水輪が球形を呈し、その横断面形は1・2よりも丸みがある。火輪は軒口が厚く、軒上辺中央から両端に向かって強く反り上がり、軒端は外傾する。風輪は扁平で、その側辺はわずかに外傾しており、火輪上辺幅よりも風輪下辺径が小さい。空輪は肥大化し、最大径は中央よりやや下に位置する。4は高さ92.0cmの大型塔であり、地輪の正面観は正方形で、高さと同幅である。水輪は上下のくびれが浅い樽形を呈し、火輪の軒上辺は中央が直線的で両端に向かって反り上がり、軒端は垂直である。空風輪は歪んでおり左側に傾いている。5は今回図示した一石五輪塔の中では、銘文の年代が最も新しい。水輪と空風輪のくびれが浅く、水輪の横断面形と風輪下端は隅丸方形を呈する。

銘文は、2～5は地輪正面右側に年号、左側に月日、中央に法名を刻むが、1のみは右側に法名、左側に年月日を刻む。また、2のみ火輪軒口に「権」、水輪中央に「小」を刻み、地輪の「僧都」と続く。

梵字はいずれも1面のみ刻み、1・4は各輪正面に発心門の梵字（下からア・バ・ラ・カ・キャ）

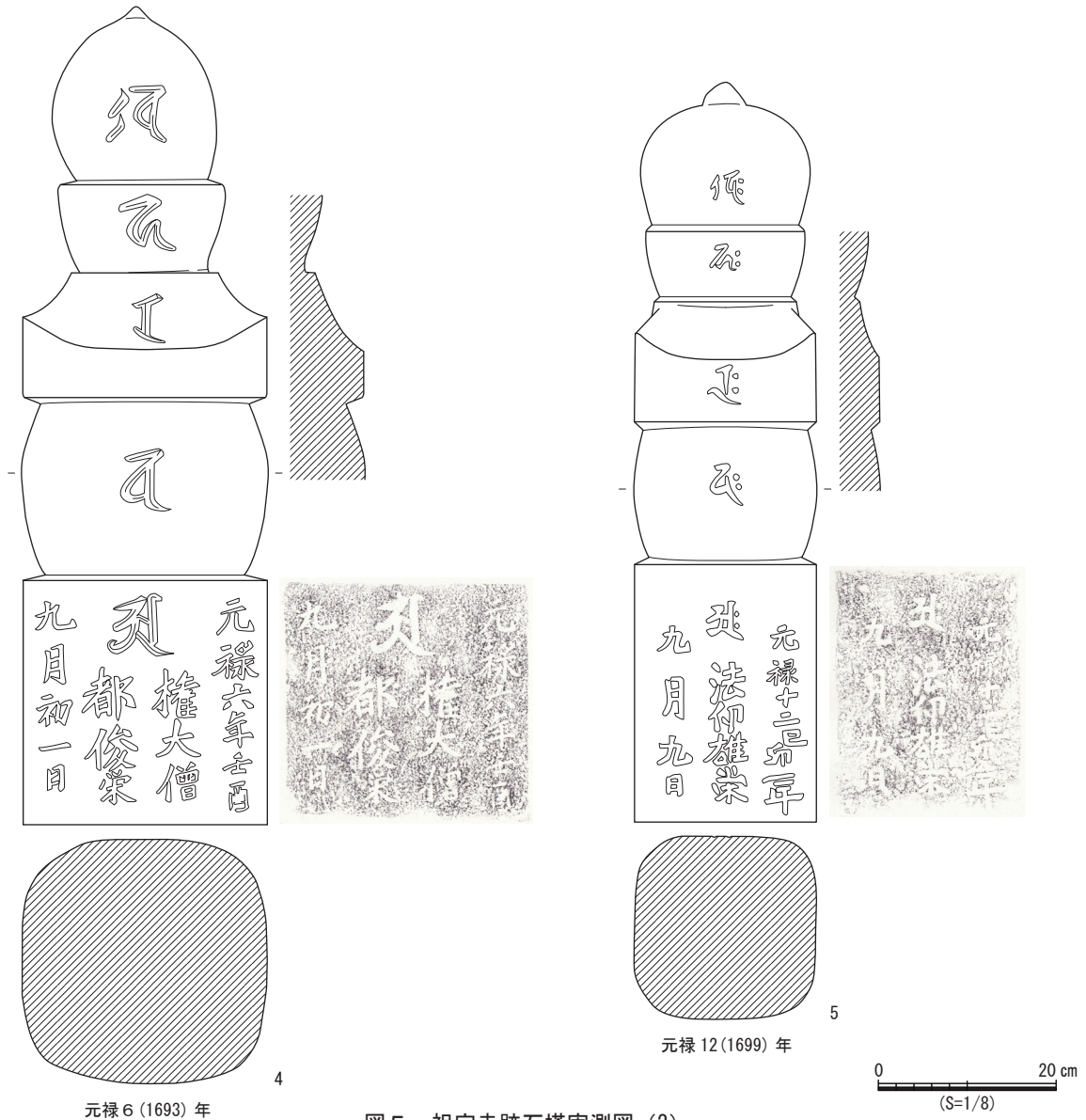


図5 祖宝寺跡石塔実測図(2)

を、5は同様に涅槃門の梵字（下からアク・バク・ラク・カク・キヤク）をそれぞれ陰刻する。一方、2は空輪のみに発心門の梵字アを刻み、3は水輪・火輪軒口・火輪屋根・風輪・空輪のそれぞれに発心門の梵字を刻む。

松尾山麓廃寺（不破郡関ヶ原町松尾）

貞享3（1686）年に笠松奉行所へ提出された松尾山絵図面には、密蔵院と自性院と考えられる二ヶ寺が松尾山麓に描かれている（関ヶ原町1992）。いずれも真言宗の寺院で近世以降に廃寺となっており、各寺院の場所が定かでないため、小稿では仮に「松尾山麓廃寺」と呼称する。当地には石積みを伴う複数の平坦面が認められ、組合せ式五輪塔や一石五輪塔などの石塔が散在しており、そのうち一石五輪塔1基と台座1基を図示した（図6）。

6は柄式であり、地輪は縦長である。水輪は最大径が突出する算盤玉形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。地輪中央の銘文は「天正六〇」としたが、「〇」は「年」の異体字と考えられる。7は台座であり、下辺幅15.2cm、上辺幅17.4cmで、上面に円形の柄穴を有する。側面には剥離痕、上面には敲打痕が明瞭に残り、仕上げ段階の加工痕が観察できない。なお、6と7は近接して発見され（写真1）、付近に他の一石五輪塔がないことや、柄と柄穴の連結、台座と一石五輪塔の大きさに違和感がないことなどから、6と7は一具であった可能性が高い。しかし、台座は下面よりも上面が広いため安定性を欠き、側面に剥離痕が残ることなどから、この台座はもともと地中に埋められて使用することを前提として製作され、機能時には一石五輪塔のみが地上に見えていた可能性がある。

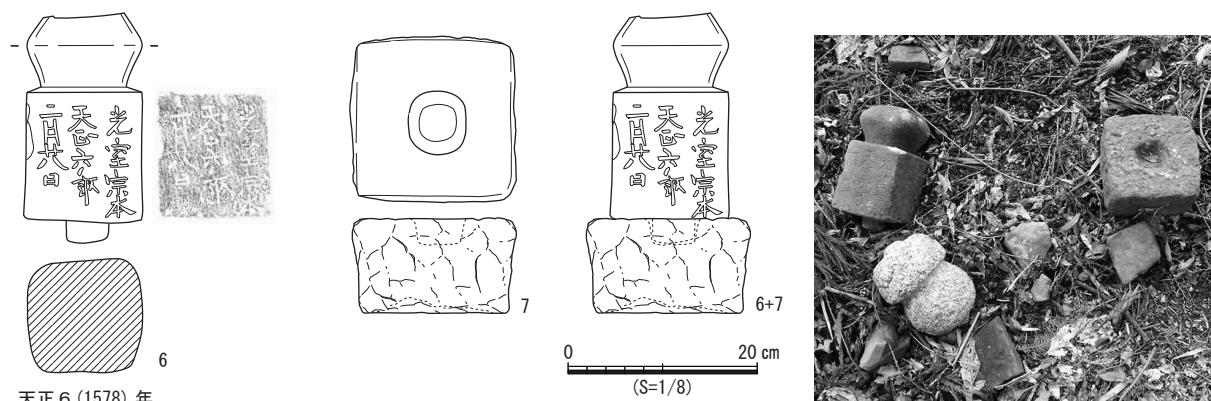


図6 松尾山麓廃寺石塔実測図

写真1 石塔発見状況

宝聚院（大垣市上石津町牧田）

宝聚院は平治元（1159）年の創建で、近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基したとされている。当初は真言宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔14基を図示した（図7・8）。

8の銘文には「文安五年」（1448年）とあり、これまで知られている美濃の一石五輪塔では最も古い紀年銘を有する。埋込式であり、水輪は最大幅が中央付近にある球形を呈し、その横断面形も円形に近い。火輪は軒上辺中央付近から両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。空風輪はいずれも下方のくびれが深く、空輪は宝珠形を呈する。9は水輪が球形を呈し、その横断面形は隅丸方形である。火輪の軒上辺中央は直線部分が長く、両端の反り上がりも直線的で、

空輪径よりも風輪径が明らかに大きい。14 と 16 は各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。17・18 は小型品であり、17 は銘文に「童子」とある。17 は火輪の軒口が厚く、両端の反り上がりが低い。19・20 は柄式であり、いずれも各輪正面に発心門の梵字を陰刻する。19 は銘文のうち年月の記載が小さく、20 は銘文が地輪正面に書ききれず、左側面にまで及んでいる。また、火輪の軒上辺端の反り上がりは 19 が三角形状で、20 が細長く直角に近い角度である。21 は宝聚院の過去帳に記載のある僧侶の石塔であり、各輪正面に法名が分けて記載されている。地輪は縦長で、水輪のくびれが浅く、火輪の屋根は屈折している。また、風輪は扁平で、空輪は宝珠形を呈する。

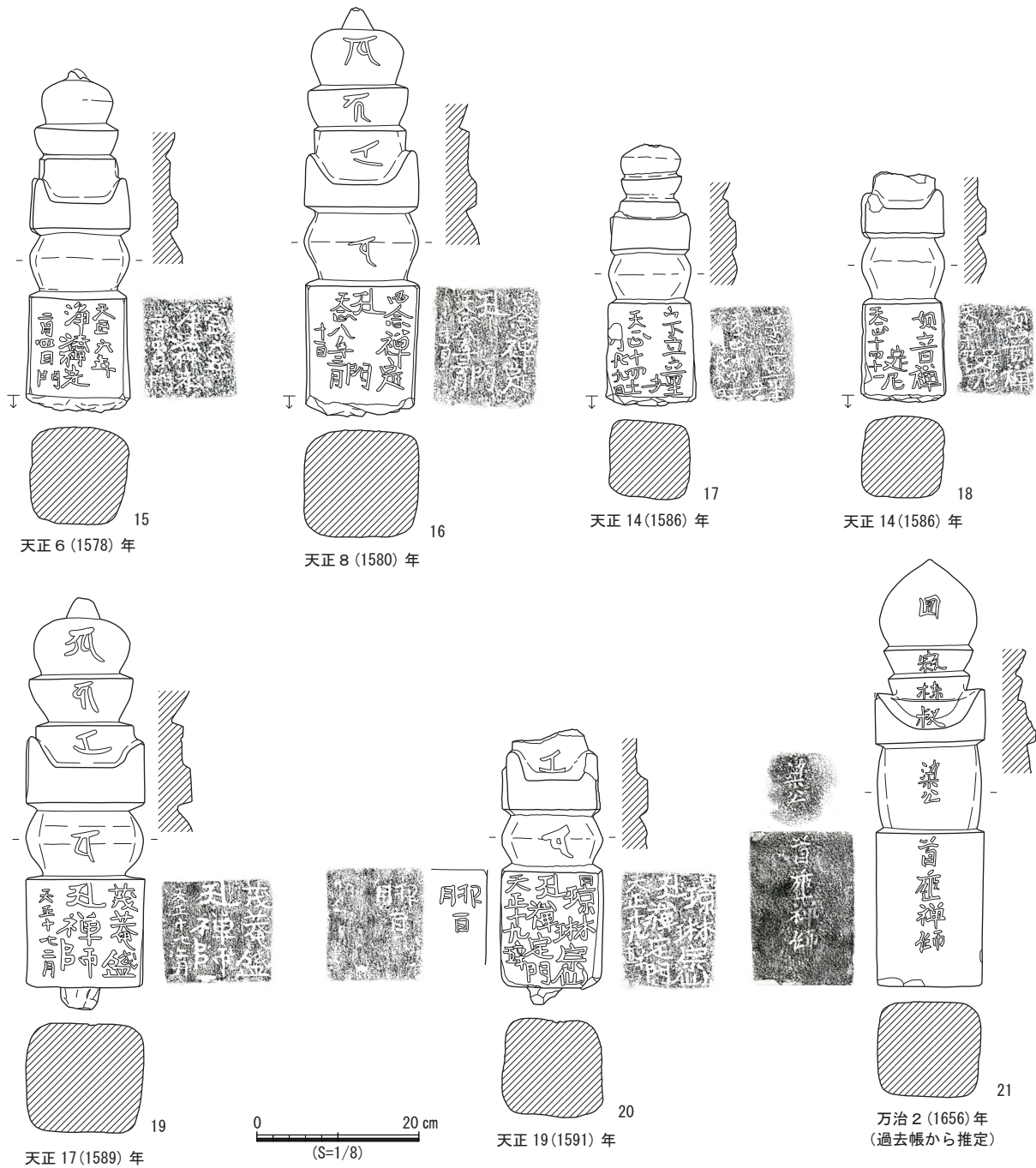


図 8 宝聚院石塔実測図 (2)

天喜寺（大垣市上石津町一之瀬）

天喜寺は天喜5（1057）年の創建とされ、近江国に所在した寂室円広禅師の法を嗣いだ雙桂定巖和尚が貞治5（1366）年に開山したとされている。当初は天台宗であったが、後に臨済宗に改宗した（上石津町教育委員会 2004）。寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔や石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔1基を図示した（図9）。

22の銘文には「文明三」（1471年）とあり、天喜寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古い。地輪は縦長であるが、下方の約3分の1を地中に深く埋め込むため、機能時には横長に見えていたと考えられる。水輪は球形を呈し、その横断面形は円形に近い。火輪は軒上辺中央が直線的で、両端に向かって緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。また、隅棟は緩やかに湾曲する。

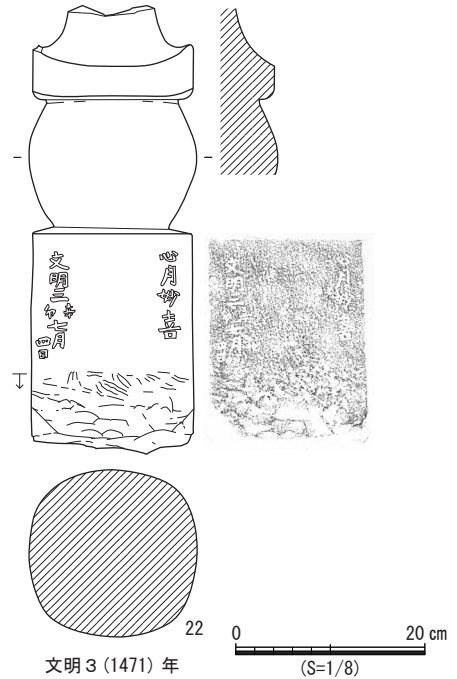


図9 天喜寺石塔実測図

大通寺（養老郡養老町宇田）

大通寺は臨済宗妙心寺派の寺院であり、土岐悪五郎康貞の菩提寺で、同人を開基とする。応永年間（1394～1428）の創建であり、関ヶ原の戦いにて堂や記録類が焼失したとされている（養老町 1978）。当地には宇田城があったとされ、寺域内の墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が並べられており、そのうち一石五輪塔2基、台座1基を図示した（図10）。

23は地輪幅が広く、重量感のある石塔である。地輪底面の形状は尖り気味で、剥離痕が未調整のまま明瞭に残る。24は地輪正面下方に線彫りの格狭間を有する。水輪の最大径は中央からやや上に

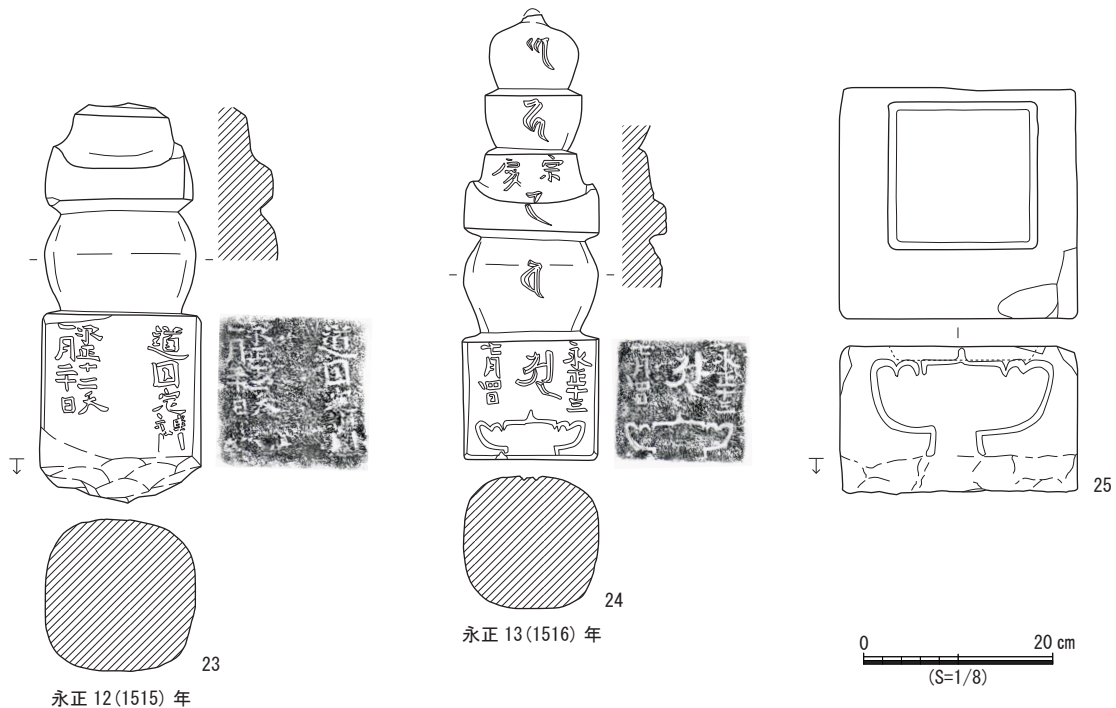


図10 大通寺石塔実測図

位置し、火輪の軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がり、空風輪のくびれは深い。また、火輪屋根に「宗慶」、地輪右側に年、左側に月日を刻み、各輪正面に発心門の梵字を陰刻するが、火輪の梵字は屋根から軒口にかけて刻まれている。なお、24の地輪底面にはコンクリートが貼り付けられており、地輪底面が浅く窪んでいることは観察できるが、安置式か柄式かの識別はできなかった。25は一石五輪塔の地輪下端を落とし込む形態の台座と考えられ、上面には一辺約15.7 cm、深さ約1.5 cmの方形の割り込みがある。また、割り込みの前面（格狭間のある面側）には幅7.2 cm、背面には幅1.5 cmの輪郭があり、前面の空間が広い。台座正面には格狭間が大きく線彫りされ、格狭間の脚から下側は剥離痕が未調整であることから、その部分は地中に埋められていたか、基壇が伴っていたと考えられる。



写真2 大通寺台座 (25)

西光寺跡（養老郡養老町直江）

西光寺は養老町直江字経堂という地にあったが、洪水のために同字村下に移転したとされている。当初は天台宗であり、応永17（1410）年に時宗に改宗した（養老町1978）。移転前の土地は、「直江志津日本刀鍛錬所跡」として町史跡に指定されており、大型の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が集積し、宝篋印塔の部材には阿号の銘文を有する近江式の基礎もある。このうち、一石五輪塔2基を図示した（図11）。

26は柄式であるが、柄が欠落している。地輪は横長であり、水輪の最大径は中央より上に位置する。地輪正面の摩滅が進行しており、銘文の積読は困難であった。27は安置式の大型塔であり、法名に阿号がある。水輪は球形を呈するが、その横断面形は隅丸方形に近い。火輪は軒口が厚く、軒上辺は中央から両端に向かって緩やかに反り上がる。また、部分的に火輪上辺と空輪下辺の識別が漸移的であり、火輪上辺幅よりも風輪下辺径の方が大きい。風輪側辺は直線的で内傾しており、空輪の頂部は右側に傾いている。なお、27は各輪ともに扁平化しており、幅に対して奥行が短い。

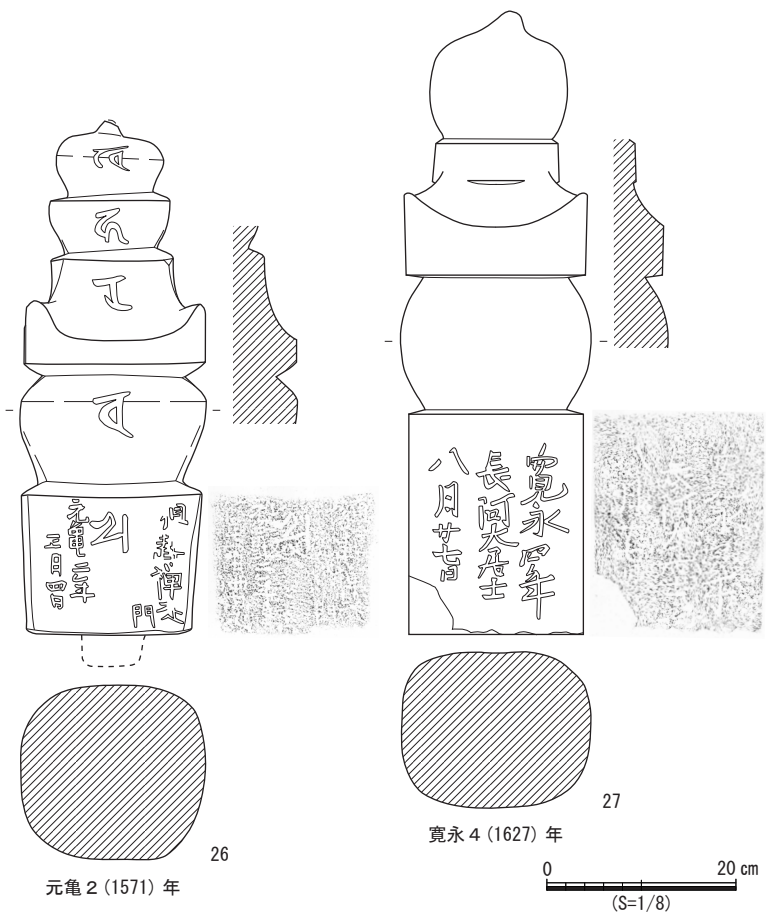


図11 西光寺跡石塔実測図

浄誓寺（養老郡養老町石畑）

浄誓寺は、当初は天台宗で誓願寺と称していたが、明應4（1495）年に浄土真宗に改宗し浄誓寺と称した。創建年代は不明で、織田信長の兵火により焼失したとの説もある（養老町1978）。境内にある地蔵堂及びその前面には、複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔、無縫塔などの石塔やその未成品、石仏が並べられており、そのうち一石五輪塔11基、一石五輪塔未成品2基、台座4基を図示した（図12～14）。

28～31は埋込式、32は柄式で、いずれも空風輪を欠く。28は浄誓寺の一石五輪塔の中では銘文の年代が最も古く、「妙幸」の下に「廿六日」が刻まれており、他の一石五輪塔と異なる文字の配置である。29は地輪下方に敲打痕が明瞭に残り、底面が突出している。30は地輪が縦長であり、梵字

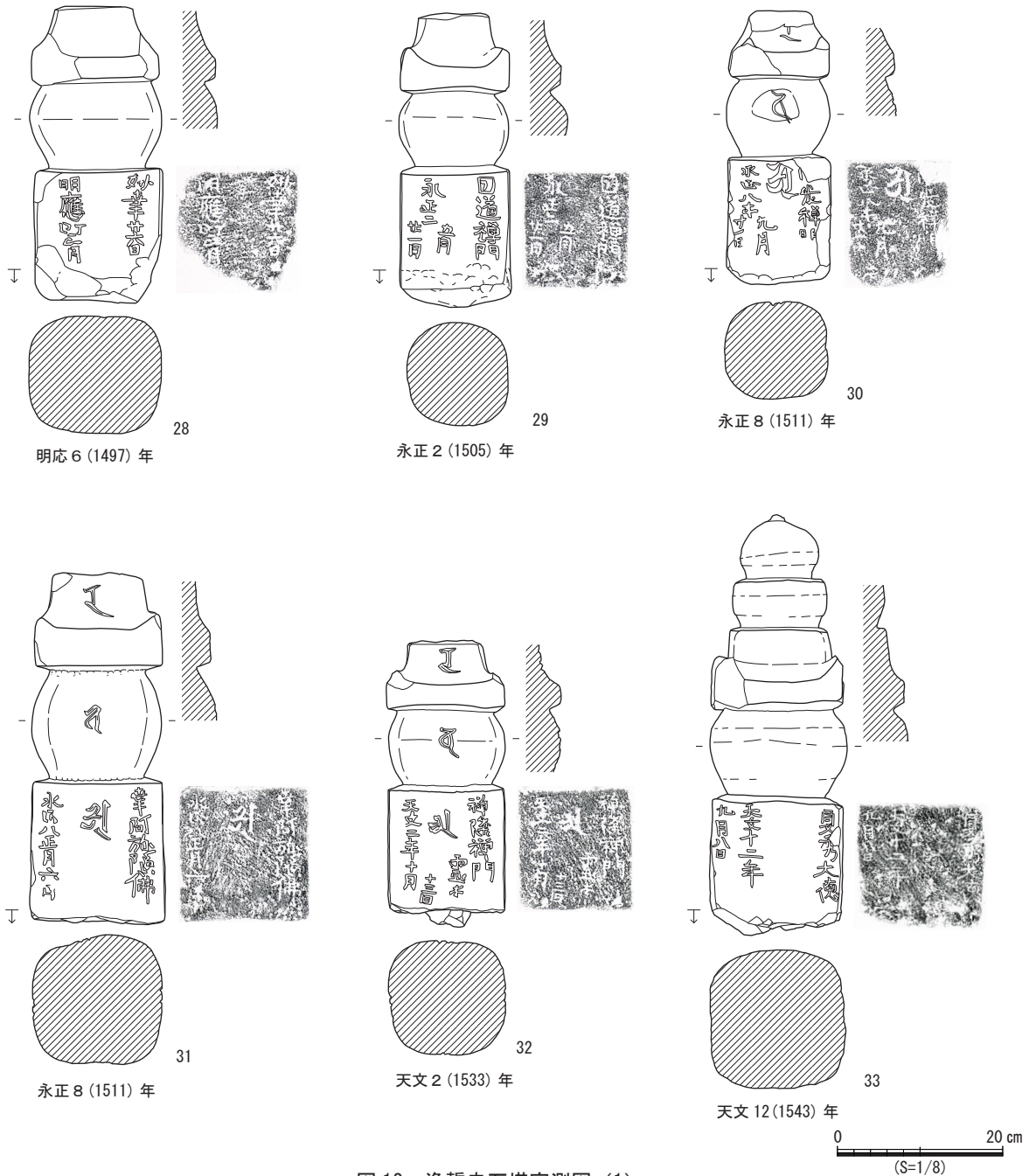


図12 浄誓寺石塔実測図（1）

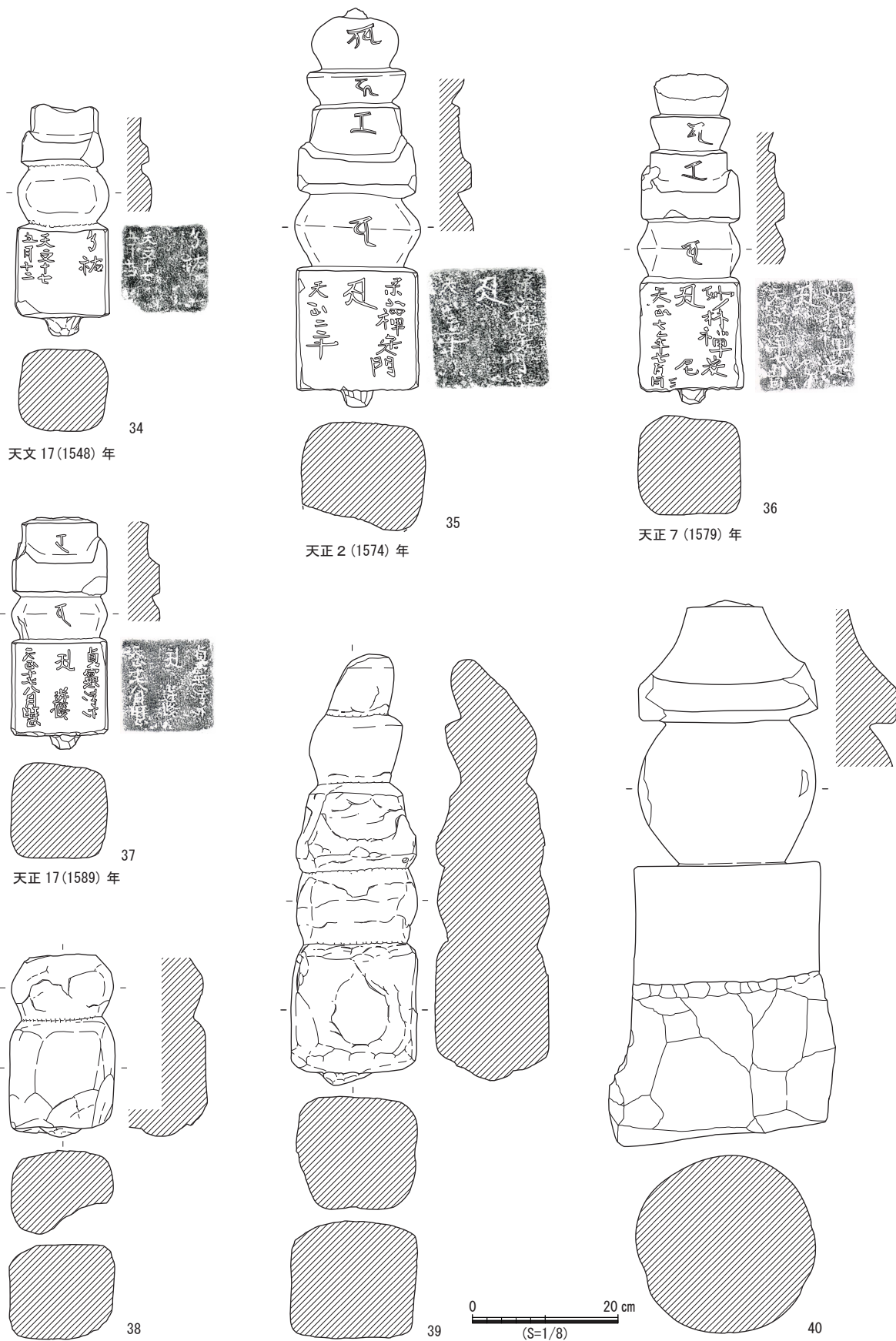


图 13 淨誓寺石塔実測图 (2)

が大きく彫りが深い。31は銘文に「阿弥陀仏」とあり、水輪の上下端部にはノミによる敲打痕が明瞭に残る。32は水輪高が低く、梵字の彫りが深い。33は埋込式で、火輪の一部を欠く以外は完存している。地輪は地表面上において高さと同幅がほぼ同じであり、水輪は最大径が中央よりやや上に位置する。火輪は屋根中央付近で稜が認められ、風輪幅は空輪幅よりも広い。34～37は柄式である。34は小型品であり、水輪の横断面形が隅丸方形で、地輪の正面右側には「了祐」という法名のみが刻まれている。35は地輪の背面が欠けているものの、それ以外の遺存状態は良い。水輪は中央が突出する算盤玉形を呈し、火輪は屋根から軒口までの間に明瞭な稜を有する。空風輪はいずれも扁平で、風輪幅は空輪幅よりも広い。36は風輪上半が欠落している。水輪は中央が突出する算盤玉形を呈し、火輪の軒口は両端の反り上がりが顕著で、風輪側辺は直線的である。37は逆修塔で、小型品である。水輪が扁平で、火輪の軒口の両端は直角に近い角度で反り上がっている。30・35～37は各輪の正面に発心門の梵字を陰刻し、31・32は各輪の四面に発心門、修行門、菩提門、涅槃門の梵字を陰刻する。38・39は柄式の一石五輪塔の未成品である。いずれも柄上端の径が広く、仕上げ段階まで至っていない。また、28～37の製品と比較すると、石塔表面の剥落が進行しているような印象を受ける。38は火輪から上が折れており、39は空風輪の一部が欠けている。39は地輪の一面が未調整で丸みを帯びており、水輪上下端のくびれが浅いことから、粗作りの段階で廃棄されたと考えられる。40は一石で造られた大型の五輪塔である。地輪は扁平で、水輪はやや歪んでいるもののほぼ球形を呈し、そ

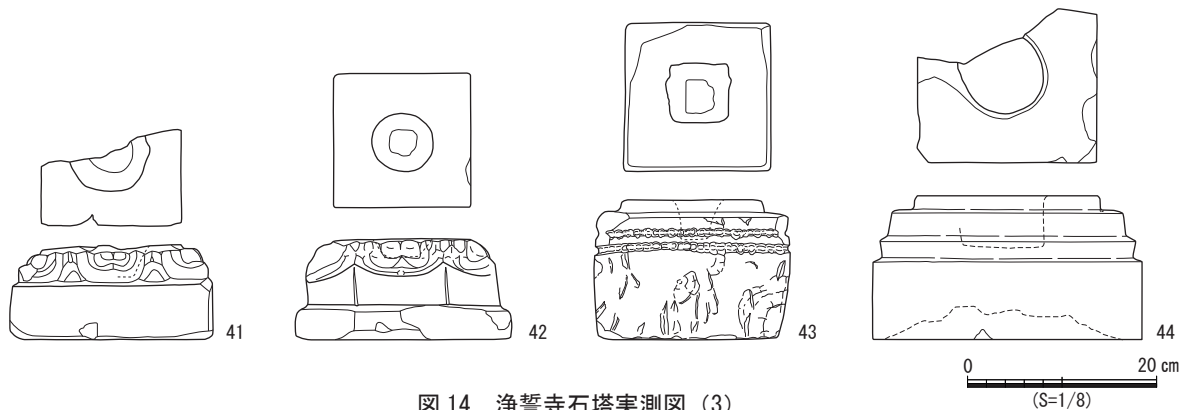


図14 浄誓寺石塔実測図(3)



写真3 浄誓寺石塔

の横断面形は円形である。地輪下には地中に埋め込まれていた部分である長さ約 22 cm の未調整の部位があり（写真 3 中央右上）、その底面には自然面が認められ（同右下）、地輪との境にはノミによる連続した敲打痕が残る。また、他の砂岩製一石五輪塔と異なり、白色粒が目立つ石材を使用している。41～44 は台座である。41・42 は反花座であり、上段には各面中央と四隅に複弁を計八葉飾り、その間に間弁を刻出し、その上に方形座を設ける。42 は反花座の下に高さ約 3.6 cm の基壇とも言うべき扁平な部位を有する。43 は上段に敲打によって施された 2 条の線が残りに、方形座の中央には方形の柄孔がある。44 は大型の台座で、柄穴も大きく深い。

明台寺（大垣市墨俣町墨俣）

明台寺は墨俣町墨俣字上宿に創建され、江戸時代になって現在の寺町に移転した。当初は真言宗であったが、後に浄土宗に改宗した（墨俣町役場 1956）。明台寺が創建された字上宿付近には、室町時代以前の主要街道である鎌倉街道の宿場町があったとされ、当地は長良川の渡河地点でもあり、交通の要衝であった。なお、明台寺の境内墓地には複数の宝篋印塔や組合せ式五輪塔、一石五輪塔などの石塔が散在しており、そのうち一石五輪塔 3 基を図示した（図 15）。

45・46 は安置式で、地輪が縦長である。水輪の横断面形は 45 が円形、46 が隅丸方形であり、46 は梵字周辺のみ平坦に成形している。火輪はいずれも軒上辺が直線的で、両端に向って緩やかに反り上がり、軒下辺も両端でわずかに反り上がる。なお、45 の地輪底面には自然面が残る。47 は柄式であり、地輪は横長で、柄径が 8.2 cm と太い。水輪は中央が突出し、火輪は軒上辺中央が直線的で両端に向って緩やかに反り上がり、屋弛みも緩やかである。空風輪は、空輪径よりも風輪径が大きい。なお、45～47 はいずれも発心門、修行門、菩提門、涅槃門の梵字を各輪の四面に陰刻しており、47 には美濃守護代斎藤利藤の養子である斎藤利為の法名が刻まれている（横山 1996）。

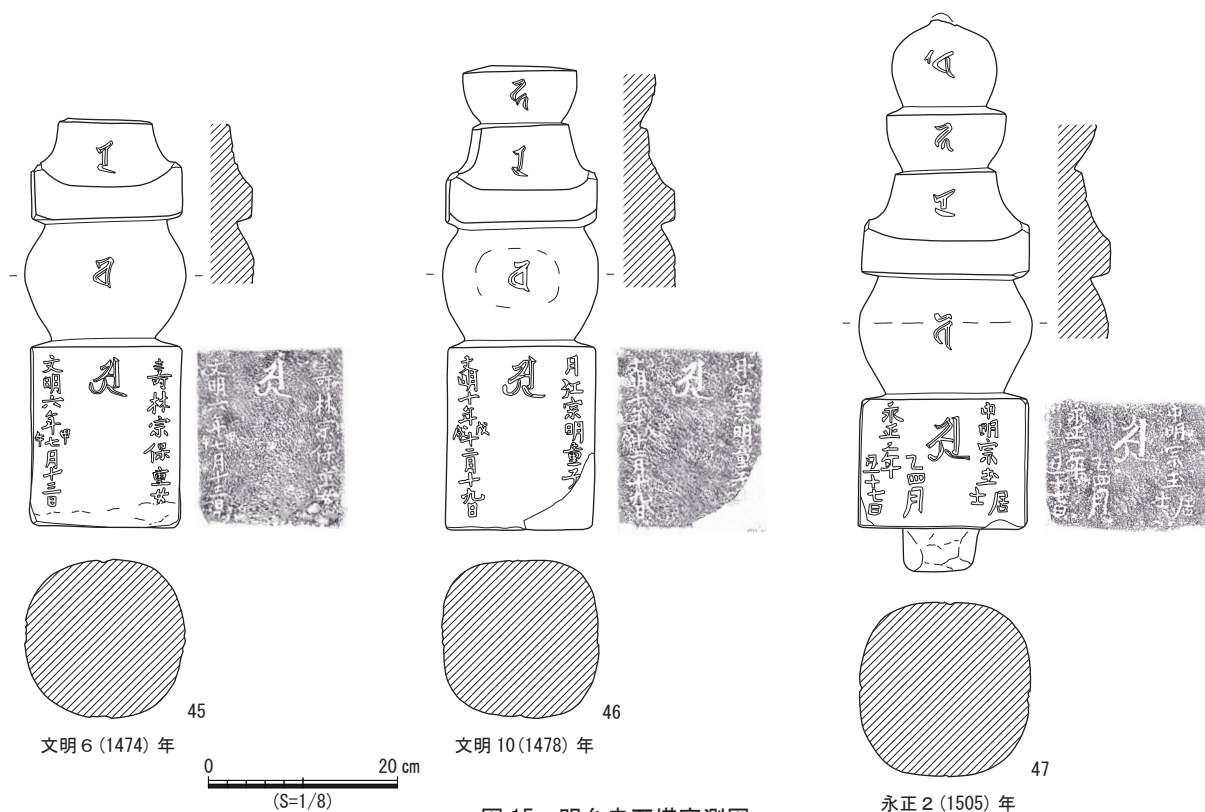


図 15 明台寺石塔実測図

表1 一石五輪塔・台座の大きさ等

No.	所在地	分類	大きさ(※)			梵字位置	銘文 西暦	銘文
			a	b	c			
1	祖宝寺跡	安置式	21.0	36.9	90.6	一面	1630	為権大僧都□□(榮カ)□□/(梵字)/寛永七年二月十一日
2	祖宝寺跡	安置式	13.6	17.0	55.0	空輪ニア	1656	明暦二丙年/権少僧都□(快カ)宥□(靈カ)位/□(正カ)月廿四日
3	祖宝寺跡	安置式	17.0	27.0	76.0	一面	1672	寛文十二壬子天/為大法師頼真/十月初七日
4	祖宝寺跡	安置式	27.5	27.5	92.0	一面	1693	元禄六年壬□(西カ)/(梵字)/権大僧/都俊榮/九月初一日
5	祖宝寺跡	安置式	20.6	29.0	83.0	一面	1699	元禄十二巳卯年/(梵字)法印雄榮/九月九日
6	松尾山麓麿寺	柄式	12.5	13.8	-	-	1578	光室宗本/天正六□/二月廿八日
7	松尾山麓麿寺	台座	17.4	-	10.0	-	-	-
8	宝聚院	埋込式	13.2	12.1	40.4	-	1448	妙現禪尼/文安五年□(四カ)月六日
9	宝聚院	埋込式	13.6	11.9	45.8	-	1505	妙壽/永正二四月廿四
10	宝聚院	埋込式	12.8	11.5	39.9	-	1508	栄明禪尼/□(永カ)正五五月十一日
11	宝聚院	埋込式	13.4	12.3	-	-	1525	道□禪定門/大永五年
12	宝聚院	埋込式	16.6	13.3	-	-	1531	鉄岳常/金禪定門/享禄四年/七□(月カ)八日
13	宝聚院	柄式	13.6	13.1	45.6	-	1564	永禄七甲子/妙桂禪定尼/六月二□(日カ)
14	宝聚院	埋込式	15.0	15.4	50.1	一面	1575	妙壽禪尼/(梵字)/天正三年九月九日
15	宝聚院	埋込式	11.4	12.0	40.3	-	1578	天正六年/浄法禪定門/□(二カ)月四日
16	宝聚院	埋込式	13.0	13.5	48.1	一面	1580	西念禪定門/(梵字)/天正八年三月/十一日
17	宝聚院	埋込式	10.4	11.5	31.8	-	1586	□立童子/天正十四十一/□(月カ)廿九日
18	宝聚院	埋込式	9.6	11.3	-	-	1586	如音禪/定尼/天正十四十一
19	宝聚院	柄式	14.2	13.2	48.1	一面	1589	茂庵盛禪師/(梵字)/天正十七二月
20	宝聚院	柄式	12.0	14.3	-	一面	1591	環琳宗仙/(梵字)禪定門/天正十九辛卯/五月一日
21	宝聚院	安置式	13.2	18.9	52.7	-	1656	圓寂棟叔梁公首座禪師
22	天喜寺跡	埋込式	17.0	14.8	-	-	1471	心月妙喜/文明三辛卯七月四日
23	大通寺	埋込式	15.9	15.1	-	-	1515	道□(因カ)定門/永正十二天/一月二十日
24	大通寺	不明	13.4	12.6	46.8	一面	1516	宗慶/永正十三/(梵字)/七月四日
25	大通寺	台座	25.2	-	15.4	-	-	上面幅25.2cm、奥行24.4cm
26	西光寺跡	柄式	16.9	14.7	54.5	四面	1571	[] 禪□(定カ)門/(梵字)/元龜二年/□月四日
27	西光寺跡	安置式	18.5	23.5	66.0	-	1627	寛永四年/長阿大居士/八月二十七日
28	浄誓寺	埋込式	14.9	11.8	-	-	1497	妙幸廿六日/明應丁巳正月
29	浄誓寺	埋込式	12.9	11.6	-	-	1505	□(因カ)道禪門/永正二年五月廿一日
30	浄誓寺	埋込式	12.2	13.2	-	一面	1511	□□(長カ)禪門/(梵字)/永正八年九月十一日
31	浄誓寺	埋込式	15.9	15.2	-	四面	1511	幸阿弥陀佛/(梵字)/永正八正月六□(日カ)
32	浄誓寺	柄式	14.2	14.5	-	四面	1533	禪□(隆カ)禪門靈□/(梵字)/天文二年十月十三日
33	浄誓寺	埋込式	15.6	13.1	47.9	-	1543	□秀大徳/天文十二年/九月八日
34	浄誓寺	柄式	12.0	12.1	-	-	1548	了祐/天文十七/五月廿二
35	浄誓寺	柄式	15.9	16.5	52.5	一面	1574	宋心禪定門/(梵字)/天正二年
36	浄誓寺	柄式	13.5	14.7	-	一面	1579	妙林禪定尼/(梵字)/天正七年七月□日
37	浄誓寺	柄式	12.4	12.7	-	一面	1589	貞憲□□/(梵字)逆修/天正十七八月時正
38	浄誓寺	柄式未成品	14.3	13.0	-	-	-	-
39	浄誓寺	柄式未成品	17.4	16.1	-	-	-	-
40	浄誓寺	埋込式	25.3	15.8	-	-	-	-
41	浄誓寺	台座	21.4	14.9	10.1	-	-	-
42	浄誓寺	台座	23.0	14.5	10.7	-	-	-
43	浄誓寺	台座	20.7	14.7	14.8	-	-	-
44	浄誓寺	台座	28.5	19.0	15.2	-	-	-
45	明台寺	安置式	15.7	19.0	-	四面	1474	壽林宗保童女/(梵字)/文明六年甲午七月十三日
46	明台寺	安置式	15.6	19.3	-	四面	1478	月江宗明童子/(梵字)/文明十年戊戌十二月十九日
47	明台寺	柄式	17.4	13.8	53.5	四面	1505	申明宗玉居士/(梵字)/永正二年乙丑四月十七日

※ 大きさa:一石五輪塔の地輪幅、台座の最大幅
 大きさb:一石五輪塔の地輪高(地表面上に見えている高さ)、台座上面の方形座幅
 大きさc:一石五輪塔高(地表面上に見えている高さ)、台座高

3 属性分類と消長

次に、図示した砂岩製一石五輪塔の各部位を形や大きさなどの観点から分類し（図16～20、表2）、その消長について検討する（表3）。

(1) 地輪

地表面上にみえる縦横比について、以下のように分類した。

A類 横長（幅が広い）。

B類 縦長（縦／横が1.25未満）。

C類 縦長（縦／横が1.25以上）。

埋込式と柄式はA類とB類、安置式はB類とC類があり、埋込式は16世紀中葉までA類が多く、16世紀後葉にはB類が主体となる。柄式は確認できた数が少ないものの、16世紀前葉には出現しており、同後葉にはB類が主体となっている。安置式は15世紀後葉にB類が確認できるものの、その数は少なく、17世紀になると中世段階よりもさらに高い縦長のC類が多くなる。

(2) 水輪

正面観、横断面形、火輪との高さの比率について、以下のように分類した。

①正面観

A類 球形。最大径は中央付近、若しくは中央よりやや上に位置する。

B類 壺形。最大径は中央より上に位置し、肩が張る。

C類 算盤玉形。最大径が中央付近にあり、突出する。

D類 樽形。上下のくびれが少ない。

E類 その他。側辺が直線的となる。

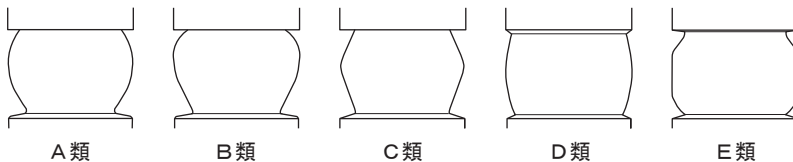


図16 水輪正面観の属性

②横断面形

a類 円形。

b類 隅丸方形（直線部分がおよそ半分以下）。

c類 隅丸方形（直線部分がおよそ半分以下）。

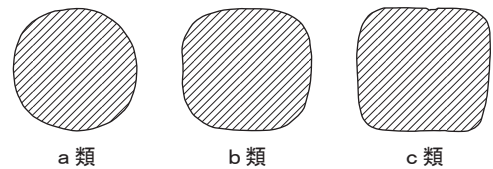


図17 水輪横断面形の属性

③水輪高と火輪高の比

1類 水輪高／火輪高が1.0以上（水輪が火輪よりも高い）。

2類 水輪高／火輪高が1.0未満（水輪が火輪よりも低い）。

正面観は、主にA類（球形）→B類（壺形）→C類（算盤玉形）→D類（樽形）と変化し、16世紀前葉から中葉にはA類とB類の両者が混在し、17世紀前半にはE類が認められる。横断面形は16世紀末まではa類（円形）→b類（隅丸方形）→c類（隅丸方形）と変化し、a類は初期の一石五輪塔のみに認められ、17世紀にはb類とc類が混在している。水輪高と火輪高の比では16世紀中葉までは1類が多いのに対し、16世紀後葉には2類が多くなり、この頃に水輪が扁平化したことがわかる。

しかし、17世紀になると再び1類が多くなる。

(3) 火輪

軒、屋弛み、隅棟について、以下のように分類した。

①軒

- A類 軒下辺は軒端が反り上がる。軒上辺中央は直線的で、軒端に向かって緩やかに反り上がる。
- B類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端に向かって緩やかに反り上がる。
- C類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端は三角形状に反り上がる。
- D類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央は直線的で、軒端は三角形状（若しくは直立気味）に高く（若しくは細く）反り上がる。
- E類 軒下辺は軒端まで直線的である。軒上辺中央から軒端に向かって緩やかに反り上がる。



図 18 火輪軒の属性

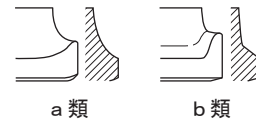


図 19 火輪屋弛みの属性

②屋弛み

- a類 滑らかに湾曲する。
- b類 屈曲（若しくは屈折）し、平面的に稜が生じる。

③隅棟

- 1類 火輪上辺まで延びる（火輪上面が方形）。
- 2類 風輪下方まで延びる。
- 3類 火輪上辺まで延びない（火輪上面が隅丸方形）。

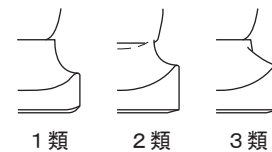


図 20 火輪隅棟の属性

軒は、15世紀中葉～後葉のみ下辺端が反り上がり（A類）、それ以降は下辺端まで直線的となる（B～E類）。また、B～E類の軒上辺は、中央の直線具合と軒端の形状から、主にC類→D類→E類へと変化し、B類は数が少ない。屋弛みは16世紀前葉まではa類が多いのに対し、16世紀中葉～後葉にはb類が多くなり、17世紀になると再びa類が多くなる。隅棟は中世段階において1類のみであり、17世紀前葉には2類が目立ち、17世紀中葉以降は1類と3類が混在する。

(4) 空風輪

空輪と風輪の高さと幅の比について、以下のように分類した。

①幅

- A類 空輪幅が風輪幅よりも狭い。
- B類 空輪幅が風輪幅よりも広い。

②高さ

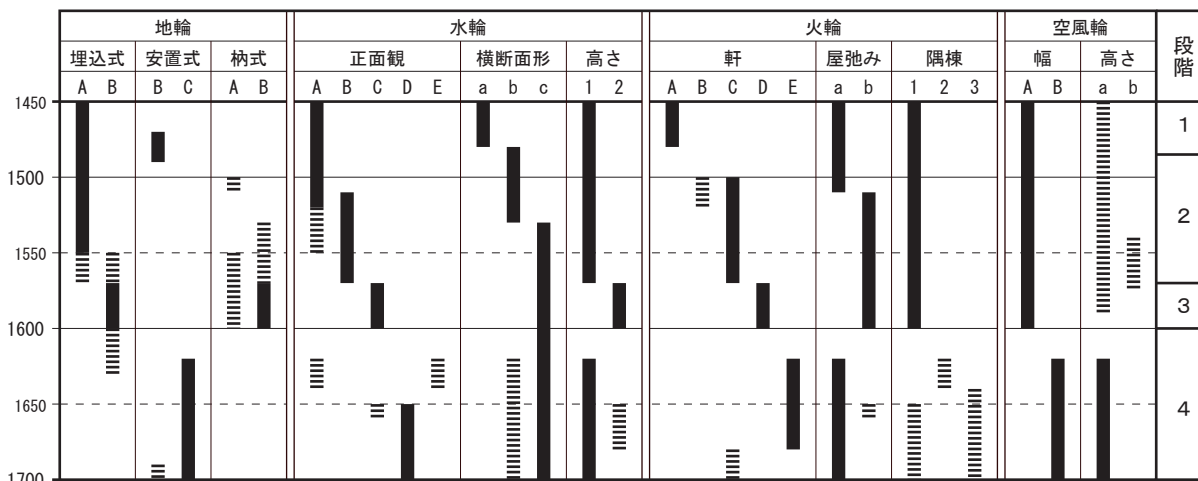
- a類 空風輪高／風輪幅が1.2以上。
- b類 空風輪高／風輪幅が1.2未満。

空風輪の幅は16世紀まではA類のみであるが、17世紀以降は空輪幅が肥大化し、B類が多くなる。一方、高さは空風輪が扁平化する16世紀中葉から後葉にかけてb類が存在し、それ以外の時期はa類が主体である。

表2 一石五輪塔の属性分類

No.	所在地	分類	銘文西暦	地輪	水輪			火輪			空風輪	
					正面観	横断面形	高さ比	軒	屋弛み	隅棟	幅	高さ
8	宝聚院	埋込式	1448	A類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	A類	a類
22	天壽寺跡	埋込式	1471	A類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	-	-
45	明台寺	安置式	1474	B類	A類	a類	1類	A類	a類	1類	-	-
46	明台寺	安置式	1478	B類	A類	b類	1類	A類	a類	1類	-	-
28	浄誓寺	埋込式	1497	A類	A類	c類	1類	-	a類	1類	-	-
29	浄誓寺	埋込式	1505	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	-	-
47	明台寺	柄式	1505	A類	C類	b類	1類	B類	a類	1類	A類	a類
9	宝聚院	埋込式	1505	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	A類	a類
10	宝聚院	埋込式	1507	A類	A類	b類	1類	D類	a類	1類	A類	b類
30	浄誓寺	埋込式	1511	B類	A類	b類	-	C類	-	-	-	-
31	浄誓寺	埋込式	1511	A類	A類	b類	1類	C類	a類	1類	-	-
23	大通寺	埋込式	1515	A類	A類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
24	大通寺	不明	1516	A類	B類	b類	1類	B類	b類	1類	A類	a類
11	宝聚院	埋込式	1525	A類	B類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
12	宝聚院	埋込式	1531	A類	B類	b類	1類	C類	b類	1類	-	-
32	浄誓寺	柄式	1533	B類	A類	c類	1類	-	b類	1類	-	-
33	浄誓寺	埋込式	1543	A類	B類	c類	1類	C類	b類	1類	A類	b類
34	浄誓寺	柄式	1548	B類	A類	c類	1類	C類	b類	1類	-	-
13	宝聚院	柄式	1564	A類	B類	c類	1類	C類	b類	1類	A類	a類
26	西光寺跡	柄式	1571	A類	B類	b類	2類	D類	a類	1類	A類	b類
35	浄誓寺	柄式	1574	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
14	宝聚院	埋込式	1575	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	a類
6	松尾山麓庚寺	柄式	1578	B類	C類	c類	-	-	-	-	-	-
15	宝聚院	埋込式	1578	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
36	浄誓寺	柄式	1579	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
16	宝聚院	埋込式	1580	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	b類
18	宝聚院	埋込式	1586	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
17	宝聚院	埋込式	1586	B類	C類	c類	2類	C類	b類	1類	A類	-
37	浄誓寺	柄式	1589	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
19	宝聚院	柄式	1589	A類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	A類	a類
20	宝聚院	柄式	1591	B類	C類	c類	2類	D類	b類	1類	-	-
27	西光寺跡	安置式	1627	C類	A類	b類	1類	E類	a類	2類	B類	a類
1	祖宝寺跡	安置式	1630	C類	E類	c類	1類	E類	a類	2類	B類	a類
21	宝聚院	安置式	1656	C類	D類	c類	1類	E類	b類	1類	B類	a類
2	祖宝寺跡	安置式	1656	C類	C類	c類	2類	E類	a類	3類	B類	a類
3	祖宝寺跡	安置式	1672	C類	D類	b類	2類	E類	a類	3類	B類	a類
4	祖宝寺跡	安置式	1693	B類	D類	b類	1類	C類	a類	1類	A類	a類
5	祖宝寺跡	安置式	1699	C類	D類	c類	1類	C類	a類	3類	B類	a類

表3 属性の省長



※表3では、その属性が主として使用されている時期を実線で示した。また、数が少ない場合や前後の時期状況から属性の消長が推定できる場合は破線で示した。

4 編年

前節で分析した各部位の属性の組合せと消長から、美濃における一石五輪塔の形態変化の推移を、以下のように4段階に設定した（表3、図21）⁵⁾。

- 1段階 15世紀中葉～後葉
- 2段階 15世紀後葉～16世紀中葉
- 3段階 16世紀後葉
- 4段階 17世紀前葉～後葉

以下、各段階の一石五輪塔について説明する。

(1) 1段階（15世紀中葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔が出現する時期である。埋込式と安置式があり、埋込式は地中に浅く埋めるタイプと深く埋めるタイプの2者があり、地輪幅も一定ではない。また、安置式は縦長であり、一石五輪塔の機能時の正面観は横長である埋込式と異なる。このように、初期段階の地輪は複数の形式や属性が認められる。しかし、水輪の正面観は球形（A類）、その横断面形は円形（a類）、火輪の軒下辺端は反り上がる（A類）など、水輪より上方の形態は類似している。一方、15世紀後葉には水輪の横断面形が隅丸方形（b類）となり、その正面観も最大径が中央よりやや上に位置する球形のものが認められ、水輪の形態は他の部位よりも早く変化している。なお、空風輪まで遺存している資料は少ないものの、文安5（1448）年銘を有する石塔（図21-8）は、風輪の側辺が緩やかに湾曲し、空輪は最大径が中央よりやや上に位置する宝珠形を呈している。

(2) 2段階（15世紀後葉～16世紀中葉）

美濃において、一石五輪塔が拡散する時期である。埋込式が主体であり、柄式は16世紀中葉以降に多くなる。地輪は横長（A類）が多いものの、方形に近い形状となる。水輪は正面観が壺形（B類）のものが出現し、その横断面形は隅丸方形のb類からc類へと変化する。火輪は軒上辺端が三角形に反り上がり（C類）、屋弛みの属性もa類からb類と変化する。しかし、各属性が変化する時期は一樣ではなく、変化の過程も水輪の正面観のようにA類とB類が混在する時期もある。なお、空風輪は側辺に稜が生じ、空輪は最大径が中央付近にあって下方のくびれが少ない饅頭形のものが出現する（図21-13・33）。

(3) 3段階（16世紀後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が最も多い時期である。2段階までは高さ約40～60cmの一石五輪塔が大半を占めているが、少なくとも3段階にはそれ以外に高さ30cm前後の小型品が出現している。埋込式が主体であるが、柄式の数が増えており、地輪は縦長（B類）が主体となる。水輪は正面観が算盤玉型（C類）、その横断面形は隅丸方形のc類、水輪高と火輪高の比は2類となり、2段階までの様相と大きく変化している。また、火輪も軒上辺端の反り上がりが高くなり（D類）、屋弛みは大半が屈折するb類である。空風輪は扁平化（b類）が進行し、空輪幅が風輪幅よりも明らかに狭いタイプが多くなる。

(4) 4段階（17世紀前葉～後葉）

美濃において、一石五輪塔の造立数が激減する時期である。確認できた数は少ないが、安置式が主体であったと考えられ、17世紀前葉には埋込式がわずかに残る。この段階には、地輪のC類や水輪

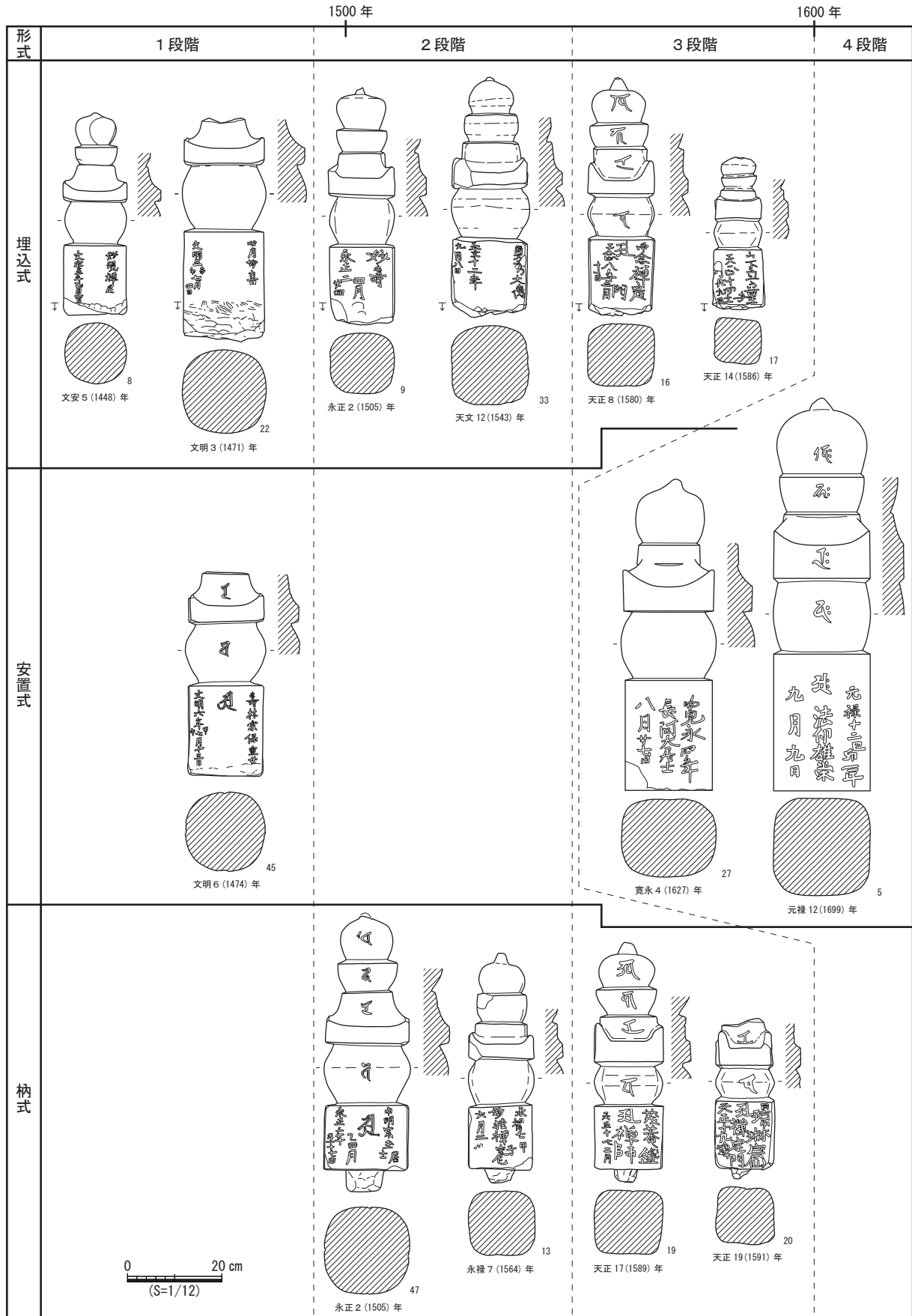


图 21 一石五輪塔編年图

の正面観のD・E類、火輪の軒形態のE類、空風輪のB類など、3段階までに認められない属性が多く出現している。また、3段階において主体的であった水輪の2類や火輪のb類などの属性も、4段階になるとそれぞれ1類やa類へと変化する傾向がある。一石五輪塔全体の大きさをみても、この段階には高さ60cmを超える大型品が出現している。さらに、小稿では属性分類に含めなかったが、地輪の銘文の表記法も3段階までは向かって右側に名前、左側に年月日を刻むものが多い（小野木他2017）が、今回資料を追加して実見した限りでは、4段階の資料には中央に名前、向かって右側に年号、左側に月日を刻むものが多いようである。このように、4段階の一石五輪塔は3段階以前の属性と比較して大きく変化しており、編年上の画期といえる。

5 まとめ

一石五輪塔は、「15世紀に入るところ、おそらく大阪府南部付近をその発生地として、全国に広がっていく」と考えられている（狭川2018）。一方、美濃では少なくとも15世紀後葉頃には一石五輪塔が出現しており、伊勢や三河、遠江、駿河では16世紀に入ってから出現する（竹田2017、松井2017、溝口2017）ことと比較すれば、東海地方においていち早く一石五輪塔が導入された地域といえる。

美濃における15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔は、これまで22地点29基⁶⁾が知られている。市町村別の基数では養老町4、垂井町2、大垣市14（このうち大垣市上石津町2、大垣市墨俣町12）、輪之内町1、瑞穂市2、岐阜市6であり、これらの分布は、およそ垂井町・養老町などの西部域と大垣市墨俣町・岐阜市などの東部域に分かれる（図22）。

このうち、西部域の寺院には、開山・開基に近江の僧侶が関係している宝聚院と天喜寺が含まれている。宝聚院は近江国に所在した永源寺の僧悦岩が文安元（1444）年に開基し、その4年後にあたる文安5（1448）年の年号を有する一石五輪塔が造立されており、これが美濃の一石五輪塔では最古の年号を有するものである点は注目できよう。宝聚院の一石五輪塔は文安5年以降、永正2（1505）年まで年号の刻まれたものが確認できないが、宝聚院から南東へ約3km離れた天喜寺には文明3（1471）年銘の一石五輪塔が存在している。また、同じく西部域の浄誓寺も明應4（1495）年に改宗し、その2年後にあたる明應丁巳（1497年）の銘を有する一石五輪塔が造立されており、宝聚院と同様に寺院の開基や改宗の数年後の年号が刻まれた一石五輪塔が造立されている。また、浄誓寺には、一石で造られた大型の五輪塔がある（図13-40）。これは、地輪下方を深く埋め込むもので、形態的に一石五輪塔が美濃に伝えられた頃の造立と考えられ、近江でも散見できる。このように、美濃の一石五輪塔の導入の経緯は、寺院の開基や改宗を契機に、石塔に関する新しい情報が近江を含む他地域から波及したことが一因としてあったと考えられる。

一方、東部域の一石五輪塔は大垣市墨俣町、輪之内町、瑞穂市などの長良川流域に集中しており、特に大垣市墨俣町所在の明台寺には、15世紀代の

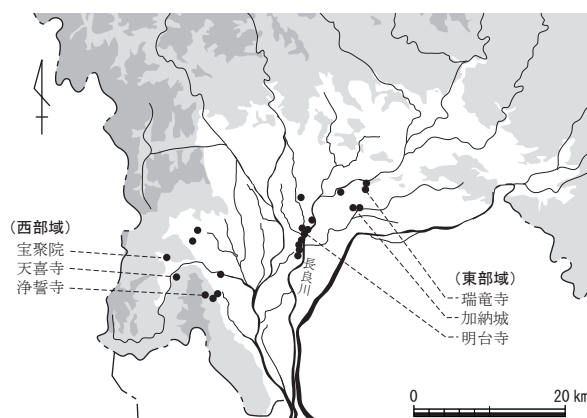


図22 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の分布

年号が刻まれた一石五輪塔が6基もある。そのうち3基は美濃守護代斎藤利藤との関連が指摘され(横山1996)、1基は斎藤利為の法名が刻まれている(図15-47)。また、大垣市墨俣町は室町時代以前の主要街道である鎌倉街道の宿場町があったとされ、当地は長良川の渡河地点でもあり、交通の要衝であった。さらに、その上流の岐阜市域でも加納城跡や瑞龍寺などで15世紀代の一石五輪塔が確認でき、いずれも15世紀中葉から末葉にかけて成立したとされている(内堀・三宅2004)。このように、当時の長良川流域は政治・経済・文化の中心的な場であり、多くの人々が往来し、様々な情報が行き交っていたと考えられ、その拠点施設や関連施設において、いち早く一石五輪塔の情報がもたらされたと考えられる。

また、美濃における1段階の一石五輪塔は埋込式と安置式があり、前者は西部域の垂井町・養老町などに多く、後者は東部域の大垣市墨俣町・岐阜市などで確認できる。小稿では、東部域の一石五輪塔を十分に図示できなかったが、岐阜市における1段階の一石五輪塔のうち、瑞竜寺天澤院・臥雲院や法円寺のものは安置式で、地輪が縦長である。また、瑞竜寺天澤院のものは四方梵字が刻まれ(写真4)、大垣市墨俣町の明台寺一石五輪塔(図15-45・46)と類似している。このように、1段階には2つの地域で異なる形式の一石五輪塔がほぼ同時期に伝えられ、限られた階層の人々に受け入れられた可能性が指摘でき、2段階には埋込式が普及し、安置式は淘汰されていったと考えられる。

次に東海地方に目を向けてみると、初期の一石五輪塔は、美濃、伊勢、三河の各地域において、いずれも水輪の横断面形が円形を呈している点が共通している。これは、すでに多くの研究者が指摘するように、一石五輪塔が各地の組合せ式五輪塔を模倣して成立したことに起因すると考えられ、成立時期が異なっても、同じ属性を有している点が特徴といえる。しかし、美濃における3段階の水輪の算盤玉形を呈する正面観やその扁平化、火輪の軒上辺端の反り上がりの高さなどの属性は、伊勢や三河の一石五輪塔では少なく、東海地方においては特徴的な形態といえる。さらに、この段階は一石五輪塔の造立数が増え、小型品も造られ、幅に対して奥行が短い扁平な一石五輪塔も散見できる。このように一石五輪塔の製作数の増加とともに、その造立階層が下層へと広がり、それとともに形態の在地化が進行していったと理解したい。

ところが4段階になると、一石五輪塔の造立数が激減し、美濃ではそれまでとは大きく異なる形態の一石五輪塔が出現する。さらに、美濃、伊勢、三河、遠江、駿河などの各地域で、地輪の長足化や風輪の扁平化、空輪の肥大化などの属性が確認でき、旧国を超えた石塔の斉一化を垣間見ることができる。しかし、写真5のように小型品も少なからず継続して造立されており、水輪の正面観が算盤玉形を呈するものも確認できる(図



写真4 瑞竜寺天澤院石塔



写真5 妙応寺石塔群

4-2) ことから、4段階の一石五輪塔は3段階の中世的な要素を部分的に残しつつ、他地域の影響を受けた石塔へと変化していったと考える。

おわりに

小稿では、美濃における一石五輪塔の分布と編年について検討した。今回は一石五輪塔の観察に基づく考古学的な研究方法に終始したが、一石五輪塔に限らず、石塔の分布や形態変化の要因については、宗教的・社会的・政治的な時代背景を考慮し、様々な研究分野からの検証を経た慎重な議論が不可欠であり、そのためには今後も継続した基礎的なデータの作成と蓄積が必要であると考え。

なお、小稿の執筆に際し、下記の方々からご教示をいただきました。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

狭川真一、佐藤亜聖、鈴木元、高田康成、竹田憲治、富田真一郎、中島和哉、廣瀬正嗣、松井一明、溝口彰啓、山路裕樹、瑞龍寺天澤院、浄誓寺、大通寺、天喜寺、宝聚院、明台寺

注

- 1) 図1のドット数は、平成30年10月までに筆者が一石五輪塔を確認した228箇所の所在地を示す。しかし、美濃のすべてを調査した訳ではなく、調査を進めればその数はさらに増える。
- 2) 石材が特定できないものは、一石五輪塔を実見しても判断できなかったものと、文献等に掲載された写真から石材を推定できなかったものがある。前者は関ヶ原町妙応寺の石塔、後者は揖斐郡揖斐川町の揖斐川上流域(旧徳山村)の石塔群である(岐阜県教育委員会1985)。
- 3) 銘文は、以下のとおり記載した。
 /改行、□□□欠損文字のうち字数が推定できるもの、[] 欠損文字のうち字数が推定できないもの。
- 4) 製作時の加工痕の呼称は、既存の分類(小野木2015)による。
- 5) ただし、17世紀第一四半期の年号を有する一石五輪塔は数が極めて少なく、3段階から4段階への移行期については、もう少し検討が必要である。
- 6) 15世紀代の年号が刻まれた一石五輪塔の基数は、既存の研究(横山1996)に筆者が実見したものを追加した数である。

引用・参考文献

- 内堀信雄・三宅唯美 2004 「土岐氏と道三・信長の城下町—東海の首都“革手”から天下布武の本拠“岐阜”へ—」『守護所・戦国城下町を考える』 守護所シンポジウム@岐阜研究会
- 小野木学 2012 「東海<美濃>」『中世石塔の考古学—五輪塔・宝篋印塔の形式・編年と分布—』 高志書院
- 小野木学 2015 「五輪塔(火輪)の製作工程の検討」『岐阜県文化財保護センター 研究紀要』 第1号
- 小野木学・中谷正和・竹谷充生 2017 「美濃の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』 第9回 中世葬送墓制研究会資料
- 上石津町教育委員会 2004 『新修上石津町史』
- (財)元興寺文化財研究所 1982 『高野山発掘調査報告書 奥之院・宝性院跡・東塔跡・大門』
- 北野隆亮 2017 「紀伊の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉—一石五輪塔を中心として—』 第9回 中

世葬送墓制研究会資料

- 岐阜県企画部土地対策課 1986『岐阜県土地分類基本調査「彦根東部」、「津島」、「桑名」』
- 岐阜県企画部土地対策課 1995『岐阜県土地分類基本調査「横山」』
- 岐阜県教育委員会 1985『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区 埋蔵文化財分布調査報告書』
- 国土庁土地局 1975『土地分類図（岐阜県）』
- 狭川真一 2003「戦国時代における墓地の様相」『戦国時代の考古学』高志書院
- 狭川真一 2018「中世武士の墓と近世大名墓」『第10回大名墓研究会～近世大名墓研究の到達点～』大名墓研究会
- 墨俣町役場 1956『墨俣町史』
- 関ヶ原町 1992『関ヶ原町史 通史編別巻』
- 竹田憲治 2017「伊勢・志摩・伊賀の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会
- 中世葬送墓制研究会日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 日本石造物辞典編集委員会 2012『日本石造物辞典』吉川弘文館
- 松井一明 2017「三河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会
- 松井一明・溝口彰啓 2010「第5章 石造物調査1 市域の中世石塔（1）」『岩村城跡基礎調査報告書』I 恵那市教育委員会
- 松井一明・溝口彰啓 2019「第2章 石造物調査2・3 —恵那市域の中世石塔（2）・（3）—」『恵那市遺跡詳細分布調査報告書』恵那市教育委員会
- 溝口彰啓 2017「遠江・駿河の様相」『東海と近畿の石造物から見た中世墓の終焉——石五輪塔を中心として——』中世葬送墓制研究会
- 横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所
- 養老町 1978『養老町史 通史編下巻』

岐阜県塚奥山遺跡の線刻絵画土器とその周辺

三輪 晃三

1 はじめに

塚奥山遺跡は岐阜県揖斐郡揖斐川町に位置し、揖斐川最上流の河岸段丘上に立地する。平成8年度から14年度にかけて財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センターが発掘調査を行い、縄文時代中期後葉から後期前葉を主体とする集落跡を確認した（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a）。小稿では、当遺跡から出土した縄文時代後期前葉の線刻絵画土器（以下「塚奥山No.469」という。図1右）の位置づけを検討する。

2 塚奥山遺跡出土の線刻絵画土器

（1）研究の状況

縄文時代後期前葉の器面に縄文を施した土器を取り上げた研究は、比較的少ない。縁帯文土器の成立¹⁾・展開の過程を示した泉拓良氏と千葉豊氏は、口縁部と胴部に縄文を施した「縄文地深鉢・鉢」が北白川上層式1期の主要な器種であり、千葉氏は東日本との関連で成立する可能性を指摘した（泉1981、千葉1989）。また、東海地方西部では権現山式から蜷塚Ⅲ式にかけてLRが圧倒的に優勢で、近畿地方以西との間に地域色が存在するとした（千葉2008）。植田文雄氏は、滋賀県正楽寺遺跡の調査で主に自然流路から出土した縄文土器を層位的に分析し、小稿で検討する「体部全面に縄文を施すもの」（C7類）は中津式併行から正楽寺2式にかけて存続し、同3式に消滅したことを示した（能登川町教育委員会1996）²⁾。幸泉満夫氏は、縁帯文土器成立期に中国・四国地方周辺的全縄文浅鉢を母胎として頸部を無文化した浅鉢が「口胴縄文系深鉢」（泉氏や千葉氏のいう縄文地深鉢）を誕生させ、北白川上層式1期併行に定型化するとともに近畿地方に拡散したと説明した（幸泉2009a）。また、同氏は植田氏のC7類を含めた「口縁部外面を中心に、主に口縁～胴部外面にかけての範囲を全面縄文のみで加飾する素文系統の土器」を「全縄文土器」と定義して西日本を概観し、北陸・中部地方の縄文時代中期末から後期初頭ではRLが優勢で、中期末では全器種口縁中の全縄文土器が占める割合は1割未満であるが後期初頭には2割を超える遺跡も存在し、気屋式期では頸部が強く屈曲し粗い縄文原体を用いる全縄文土器が盛んに製作され、北白川上層式3期以降、北陸地方を除いて一斉に消滅したと述べた。（幸泉2009b）。

（2）遺物の出土状況と所属時期

塚奥山No.469は、幸泉氏のいう全縄文土器の深鉢（口径32.8cm、器高40.8cm以上）で、胴部の一部と底部を除きほぼ完存する。全体の器形としてはバケツ状に開き、胴部の中程が外側にやや膨らむ。口縁部外面から胴部上半にかけて節の太いLR縄文を横位又は斜位に、胴部下半では縦位に転がす。この土器は堅穴建物SB9の埋土上部で破片が重なるように出土し、土器片に伴う土坑は確認できなかったことから建物廃絶後の遺物集積（SU3）に伴うとした。堅穴建物の埋土には長径30cm以下の匝円礫が多く含まれるため、堅穴を人為的に埋め戻したと思われる。SB9の埋土から出土した土器は縁帯文土器成立期から北白川上層式1期併行までの時期幅があるが、SB9埋没後に造営された掘立柱建物（SH7）と堅穴建物（SB19・20）との先後関係を整理したところ、SH7は縁帯文土器成立期のSB19・20よりも古いと考えられ

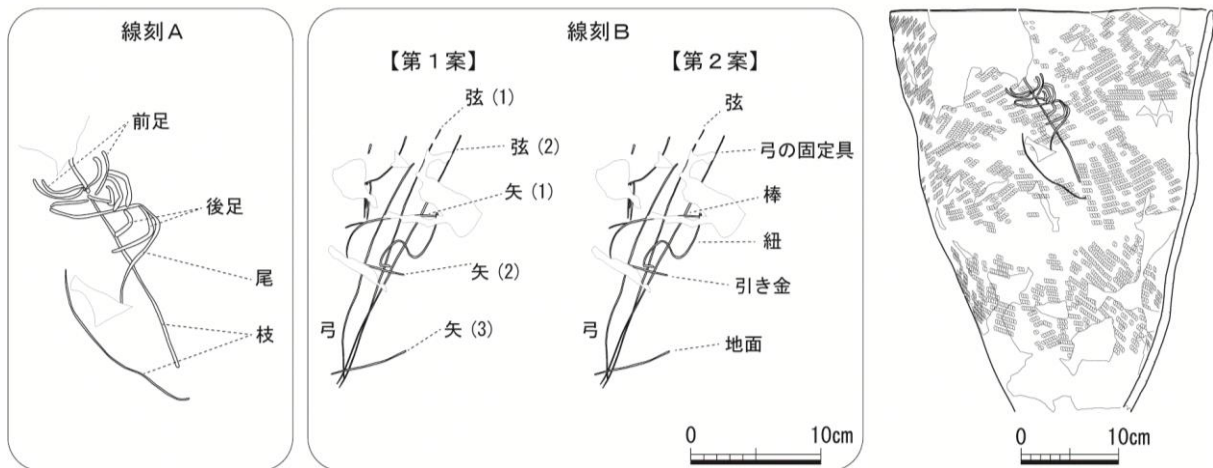


図1 塚奥山遺跡出土線刻絵画土器

ることからSU3も縁帯文土器成立期とした³⁾。

(3) 線刻画

線刻は胴部上半2箇所（線刻Aから反時計回りに約150度回転すると線刻Bに到達）にあり、「線刻A」、「線刻B」と呼称する。線刻Aは棒状の工具（沈線内に条線状の筋が観察できる）、線刻Bは先端の鋭利な工具を用いどちらも土器焼成前に描いている⁴⁾。

線刻A

線刻Aの解釈には、以下の3つの案がある。「第1案は槍を一本線で線描し、人物がこれを持っている。第2案は樹木の枝を一本線で線描し、これに動物が留まっている状況であり、開放する平行沈線の上部は腕、三股に分かれる下部は足と尻尾を表現する。長い尻尾からサルとみることができようか、第3案は狩りにより射止めた動物を一本の棒に固定した状況であり、第2案と同様に、腕と脚の解釈は同じである」（財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a第2分冊-44頁）。

第1案について、頭部、目・鼻・口の表現がないため人物と認定するには躊躇せざるを得ない。また、第3案については、線刻Aの右側に描かれぬ地面つまり「基底線」（佐原・春成1997-266頁）を想定すると、動物の尻尾が上を向くこととなり不自然である。線刻Aでは縦方向の線が左斜め上に、また線刻Bでは右斜め上に描かれていることから、両者で一对の絵画を構成する可能性が高い。線刻Aの斜め左上がりの線は2本とも1本の線で引かれ、並行する直線ではなく線の途中で屈曲していたるため枝を表現したものと考えられる。前足は左右対称に2本の線が伸びるが後足は左右非対称であるため、上半身は正面観、下半身は側面観を描いたものと理解したい。第2案として示したように、上半部の2本線は両腕（四肢獣であれば前足）、3本線は胴体で、両足（四肢獣であれば後足）と尻尾を1本線で表わす。さて、問題となるのは陸獣の種類の特定である。サルの動物形土製品⁵⁾では尻尾が短いのが通例であるが、線刻画では誇張して描くとは考えにくいから、報文で示したサル説は撤回しておきたい。ただし、長い尾を持つ樹上動物とは考えられるものの、線刻画の形状から具体的な種類を特定するには憶測の域を出ない⁶⁾。

線刻B

線刻Bは弓矢が描かれ、矢に紐を繋いでいる。具体的には、大きく弧状に描かれた線が弓本体、右斜め上に向かって直線的に描かれた線は弦と考えられ、弦と弦に直交する短沈線が2組存在する点が課題とな

るが、これについては2つの案が考えられる。

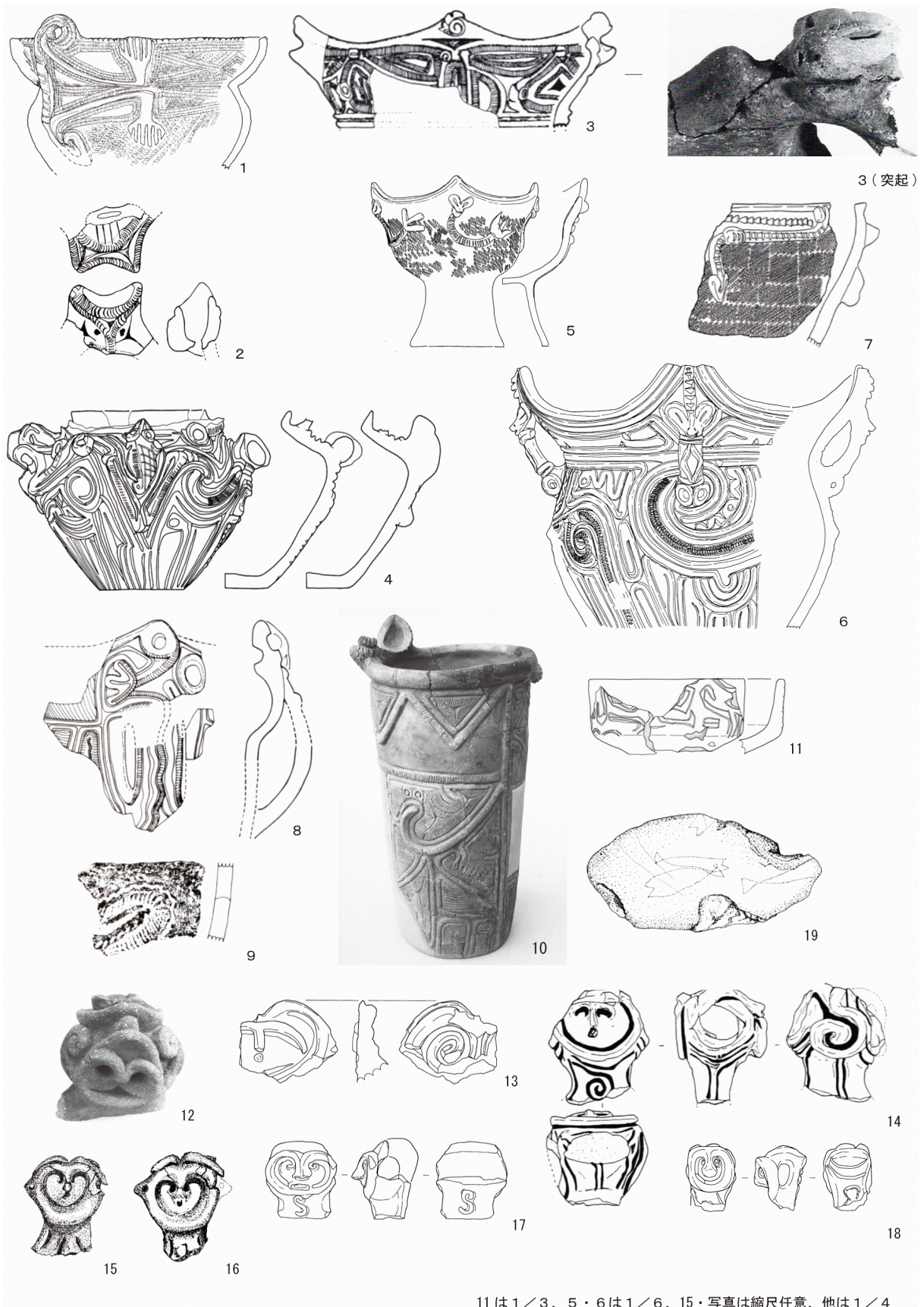
第1案は、弓矢猟を表現したものである。標的を狙って図1一矢(1)を構え、弦が(1)から(2)へ引っ張られるのに伴い、矢(2)を引き始める。連続する時間の経過は「紐」で結ばれ、一番下の線ではすでに落下している矢(3)を表現しているのかもしれない。

第2案は、仕掛け弓を表現したものである。アイヌの民族例では、「アマクー」又は「アマッポ」と呼ばれており（バチラー1995、宇多川1996）、仕掛け弓から距離をおいて打設した棒（又は木）に向けて紐を引っ張り、その紐に動物が引っかかると自動的に矢が発射される。仕掛け弓⁷⁾は、①弓、②引き金を伴う弓の固定具、③紐、④棒又は木で構成される。これを線刻Bと比較すると、①弓は第1案と同様で、右斜め上に向かって直線的に描かれた線のうち左側の1本は弦、右側の1本は②引き金を伴う弓の固定具。逆S字状に描かれた線は③紐で、②引き金と④棒に繋がれている。以上の対応関係が妥当であるならば、線刻Bは仕掛け弓が機能する姿ではなく地面に立てかけられた状態を描いたもので、矢尻が示されていないことからここには矢が描かれていないと理解しておきたい。

3 岐阜県内の縄文時代の絵画・造形

岐阜県内の縄文時代の線刻画、動物意匠の突起・把手類、顔面把手について確認する（図2・表1）⁸⁾。

図2-1は、深鉢の口縁部から胴部上半にかけて渦巻文から6本指を持つ腕が伸び、頸部を挟んで上下対称に配置されている。前期末の十三菩提式に位置づけられている。2は、口縁部に動物意匠突起が付く。半截竹管文と玉抱三叉文によってミミズクの顔を表現し、新道式との類似が指摘されている。3は、深鉢の口縁波頂部の内側に動物の顔が付けられ、切れ長の目・鼻孔・口が刺突によって表現され、「新道式との関連を持った新崎式の最新期」（小島1995-131頁）に位置づけられている。4は、鉢の胴部に動物意匠突起が付き、上山田・天神山土器様式に位置づけられている。5は、台付鉢の波頂部下に動物意匠突起が付く。目の表現ととれる短沈線を入れた隆帯を2個組み合わせた「柿の種顔」（小島1995-132頁）とも評され、鼻孔はないが口を開けている。連続刻みを入れた隆帯は胴体又は腕で、「柿の種」と反対側の端部に3本指が付く。6は、深鉢の把手上に5に類似する顔が付き2個の鼻孔が加えられている。7は、深鉢の口縁部に動物意匠文が付けられており、6とともに上山田式併行に位置づけられている。8は、口縁部の眼鏡状突起から両生類のものとされる3本指が伸びる。9は、オオサンショウウオ状の抽象文の尾部。8・9ともに藤内式に比定されている。10は、深鉢の口縁端部に口を大きく開け尻尾を巻いた動物意匠突起（へび）を付ける。胴部の縦位区画にI J字形懸垂文を施文し、藤内式（勝坂2式）に併行する（今福2008）。11はミニチュア土器に細い道具を用いて描かれているが、意匠の解釈や時期ともに不明である。12~18は顔面把手⁹⁾。12は隆帯で頭髪・耳・顔の輪郭・眉毛を表し、円形の目と富士山形の口を開ける。類似する顔面把手は新道式期に位置づけられている（三上2018）。13・14は、隆帯で眉毛・鼻をT字状に繋ぎ、顔を縁取る。12とは異なり目は短沈線、口は刺突に近い。12・14は隆帯で頭髪を渦巻き状に結ぶ。15~18は眉毛の表現がなく、顔の輪郭と鼻、顔の隆帯脇の沈線と目の刺突が各々連結する。これらのうち、13・17は縄文土器との共判関係は不明であるが、18は竪穴建物の埋土上層から中期末の土器と共伴したことが報告されている。19は砂岩製の線刻礫（長さ16.3cm、幅8cm）。表面に5尾の魚形が刻まれ、魚の種類はサケ・マス（清見村教育委員会1983）又はアユ（清見村教育委員会1990）と推測されている。出土した1号住居址は曾利Ⅲ式に併行するが、線刻礫の帰属時期は不明である（中沢2006）。



11は1/3、5・6は1/6、15・写真は縮尺任意、他は1/4

図2 岐阜県における縄文時代の絵画・造形

表1 岐阜県における縄文時代の主な絵画・造形一覧

番号	遺跡名	所在地	器種等	時期	備考
図1	塚奥山遺跡	揖斐郡揖斐川町	深鉢	後期前葉	線刻画(動物文・弓矢文)
図2-1	峰一合遺跡	下呂市	深鉢	前期末	動物意匠文
図2-2	宮ノ下遺跡	高山市国府町	器種不明	中期中葉	動物意匠突起
図2-3	下田遺跡	高山市河合町	深鉢	中期前葉	動物意匠突起
図2-4	赤保木遺跡	高山市	鉢	中期中葉	動物意匠突起
図2-5	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	台付鉢	中期中葉	動物意匠文
図2-6	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	深鉢	中期中葉	動物意匠把手
図2-7	堂ノ前遺跡	飛騨市宮川町	深鉢	中期中葉	動物意匠文
図2-8	阿曾田遺跡	中津川市	深鉢	中期中葉	動物意匠文
図2-9	阿曾田遺跡	中津川市	器種不明	中期中葉	抽象文
図2-10	森ノ下遺跡	高山市朝日町	深鉢	中期中葉	動物意匠突起
図2-11	西田遺跡	高山市丹生川町	ミニチュア土器	不明	線刻画(文様意匠不明)
図2-12	南垣内遺跡	高山市小坂町	器種不明	中期中葉	顔面把手
図2-13	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期後葉か	顔面把手
図2-14	垣内遺跡	高山市	器種不明	中期後葉	顔面把手
図2-15	門端遺跡	高山市清見町	器種不明	中期	顔面把手
図2-16	門端遺跡	高山市清見町	器種不明	中期	顔面把手
図2-17	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期後葉か	顔面把手
図2-18	堂ノ上遺跡	高山市久々野町	器種不明	中期末か	顔面把手
図2-19	門端遺跡	高山市清見町	礫	不明	線刻画(魚文)

4 塚奥山No.469 と狩猟文土器の比較

塚奥山No.469の線刻Aでは動物、線刻Bでは弓矢を描いていると解釈したが、この組み合わせは動物文・弓矢文が施された「狩猟文土器」(斎野 2006・2008)と類似する。そこで、斎野裕彦氏が指摘する狩猟文土器の主な特徴を掲げ、塚奥山No.469との相違点を下線で示す。

- ①狩猟文土器は中期末から後期前葉にかけて認められ、東北地方と北海道渡島半島に分布する。
- ②器種については、全時期を通じて深鉢が多いが後期初頭には壺が多い。
- ③狩猟文土器は、人体文を施さないもの(A類)と施すもの(B類)、いずれか不明なもの(C類)に大別され、中期末に東北中南部でB類が出現し後期初頭に北部から渡島半島に及んでA類が成立したと考えられている。
- ④狩猟文の文様単位は2又は4単位で、文様要素には弓矢文、動物文、抽象文、樹木文がある。
- ⑤弓矢文は、弓又は弓に矢をつがえた状態を意匠化したもの。弓矢文の施文方法には無文上に粘土紐を貼り付けて隆線(a1)又は隆帯とするもの(a2)と、無文上に平行沈線を引き沈線間に縄文を施すもの(a3)があり、a1は中期末から後期初頭にかけて確認されているが、a2・a3は後期初頭に限られる。
- ⑥動物文は、イノシシ又はクマを上から見た状態、又はシカを横から見た状態を意匠化したもの。動物文

の施文方法には、無文上に粘土を貼り付けて動物形に成形するもの (b1) 又は粘土紐により隆帯で動物形とするもの (b3)、動物の輪郭に沿って隆線にするもの (b2)、地文上に粘土紐を貼り付けて隆帯で動物形にするもの (b4) があり、b1 は中期末から後期初頭にかけて確認されているが、b2 は中期末、b3・b4 は後期初頭に限られる。

⑦狩猟文土器の時期別出土状況について、中期末から後期初頭では竪穴建物跡の床面又は埋土、後期初頭では土坑群や広場から出土する傾向があり、狩猟文土器を祭器として狩猟儀礼を行う場所が屋内から屋外に移動したと考えられている。後期前葉では狩猟文土器はほぼ消滅し、四肢獣形の動物形土製品に移行する。

5 まとめ

岐阜県における縄文時代の絵画・造形には、中期中葉の北陸地方や中部地方との関連を窺わせる動物意匠突起・把手類や顔面把手が多く、うち顔面把手は飛騨地域において在地的变化を遂げ中期後葉頃まで残存するようである。しかし、後期以降については線刻画を含めて極めて少ない。

塚奥山No.469 は、弓矢文・動物文を意匠化した文様を施す点では狩猟文土器の特徴と類似するものの、施文方法は狩猟文土器と決定的に異なる。また、後期前葉に弓矢文・動物文を施す狩猟文土器は全国的にも知られておらず、この土器が狩猟文土器の分布範囲から大きく離れている点も勘案すると、両者の関係を議論することには慎重を期すべきであるが、他方で岐阜県の周辺を含めて弓矢文・動物文の線刻画の系譜を説明することも難しく、今後の資料の蓄積を待って評価する必要がある。

注

- 1) 近畿地方の「四ツ池式」(泉・玉田 1986) は型式学的に福田K 2式(新段階)と広瀬土壙 40 段階(千葉 1989)に区別され、広瀬土壙 40 段階に後続する型式として芥川式(高槻市教育委員会 1995)が設定された。現在では「四ツ池式(広瀬土壙 40 段階)」と併記する場合と、四ツ池式又は広瀬土壙 40 段階いずれかの名称を用いる場合がある。なお、千葉 2008 では四ツ池式(広瀬土壙 40 段階)と芥川式を「縁帯文土器成立期」として位置づけており、報文では両者を細分できなかったことから小稿ではこの区分を用いる。
- 2) 玉田・岡田 2010 では、正楽寺 1 式及び同 2 式は北白川上層式 1 期、正楽寺 3 式及び同 4 式は北白川上層式 2 期に各々相当すると考えられている。
- 3) 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a-表 46 を参照いただきたい。
- 4) 別の工具であるか、両端の形状が異なる同一の工具であるかは不明である。
- 5) 設楽 2008 では、十面沢遺跡(青森県弘前市)、真福寺遺跡(埼玉県さいたま市)出土資料などが紹介されている。
- 6) 縄文時代後期の陸獣最少個体数の集計では、シカ・イノシシが全体(1,744 個体)の 75%を占め、他にタヌキ、ノウサギ、アナグマ、サル、ムササビ、キツネ、カワウソ、テン、オオカミ、イタチ、クマ、カモシカ、ヤマネコが知られている(西本 1991)。これらのうち、長い尾を持つ樹上性動物に限定すると、ムササビ・テン・ヤマネコが候補となるうか。
- 7) 考古資料としては、引き金の可能性のある数点の骨角器を除いて知られていないという。また、ロシア極東の先住民(樺太アイヌ・ウデヘ・ナナイ等)では、I A a 1 タイプの仕掛け弓を用いて大型獣から小型獣(テン、クロテン、オオヤマネコを含む。)が捕獲されている(宇田川 1996、65・68 頁)。
- 8) 先学の研究等(岐阜県博物館友の会 1992、吉本・渡辺 1994、小島 1995、堀澤 2004、中沢 2006)や各発掘調査報告書の分類や記述を参考に、土偶・土製品を除いて主なものを集成した。線描画の判断基準には「当該土器の型式や様式に共通する文様構成および施

文の単位や順序から独立した沈線描画を根拠とする」(宮尾 2008-1210 頁) ことが提案されており、図 2-11 も線描画として取り扱った。しかし、ミニチュア土器は「儀器・祭祀用具」(菅野 2008-1091 頁) としての機能が指摘されており、小型ゆえに簡略化された文様も見受けられるため、通常の土器と同様に線描画として扱うべきかどうか今後の課題である。

9) 名称については、他に「顔面装飾」・「人面装飾」がある。全国的な集成・分類(吉本・渡辺 1994)によると、岐阜県内の資料では口縁部より上にあるタイプ(Ⅲ類)で顔の向きが不明なものが多いが、図 2-13 は顔が外向き(ⅢA類)に分類されている。なお、両氏は表 1 以外に山本遺跡(下呂市)で中期初頭の資料(口縁部直下にあり顔が外向きのタイプ(ⅡA類))、荒城神社遺跡(高山市国府町)で中期後半の資料、下島遺跡(恵那市福岡町)で時期不明の資料を紹介されているが、いずれも図・写真は公表されていない。

挿図の出典

図 1 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007a 第 2 分冊-図 61 を再トレース

図 2 1 : 下呂町教育委員会 2003-第 22 図、2 : 国府町教育委員会 1988-挿図 26、3 : 河合村教育委員会 1987-挿図 71・図版 39、4 : 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2007b-第 76 図、5 ~ 7 : 岐阜県・宮川村教育委員会 1996-第 29 図、第 35 図、第 36 図、8・9 : 中津川市教育委員会 1985-第 303 図(無断使用禁止)、10・12 : 岐阜県博物館友の会 1992-巻頭写真 12・p 19(無断使用禁止)、11 : 財団法人岐阜県文化財保護センター 1997-挿図 271、13・17 : 久々野町教育委員会 1997-第 43 図・第 160 図、14 : 高山市教育委員会 1991-挿図 279、15・16・19 : 清見村教育委員会 1983-図 17・47

参考文献

- 泉拓良 1981 「近畿地方の土器」『縄文土器の研究』第 4 巻(縄文土器Ⅱ)、雄山閣出版株式会社
- 泉拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論—縁帯文土器—」『季刊 考古学』第 17 号、雄山閣出版株式会社
- 今福利恵 2008 「勝坂式土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
- 宇田川洋 1996 「アイヌ自製品の研究—仕掛け弓・罌—」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第 14 巻
- 河合村教育委員会 1987 『奥飛驒の縄文遺跡 下田遺跡』
- 菅野和郎 2008 「ミニチュア土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション
- 岐阜県・宮川村教育委員会 1996 『岐阜県吉城郡宮川村 堂ノ前遺跡発掘調査報告書』(国道 360 号線バイパス改修工事に伴う埋蔵文化財調査報告)
- 岐阜県博物館友の会 1992 『特別展 飛驒のあけぼの 展示図録—交流する縄文・古代人—』
- 清見村教育委員会 1983 『門端縄文遺跡発掘調査報告書』
- 清見村教育委員会 1990 『はつや遺跡発掘調査報告書』
- 久々野町教育委員会 1997 『堂之上遺跡』
- 下呂町教育委員会 2003 『峰一合遺跡(発掘調査報告書)』
- 幸泉満夫 2009a 「中国・四国地方における口胴縄文系土器群の成立と展開」『島根考古学会誌』第 26 集、島根考古学会
- 幸泉満夫 2009b 「西日本の後期全縄文土器—粗製土器からみた東日本縄文文化の影響—」『古文化談叢』第

61 集、九州古文化研究会

国府町教育委員会 1988 『岐阜県吉城郡国府町宮ノ下遺跡発掘調査報告書』

小島俊彰 1995 「北陸生まれの縄文土器動物」『飛騨と考古学 飛騨考古学会 20 周年記念誌』、飛騨考古学会
財団法人岐阜県文化財保護センター1997 『西田遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007a 『塚奥山遺跡』

財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007b 『赤保木遺跡』

斎野裕彦 2006 「狩猟文土器と人体文」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

斎野裕彦 2008 「狩猟文」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

佐原真・春成秀爾 1997 『歴史発掘⑤ 原始絵画』、株式会社講談社

設楽博己 2008 「縄文人の動物観」『人と動物の日本史 1 動物の考古学』、株式会社吉川弘文館

ジョン・バチラー1995 『アイヌの伝承と民俗』(安田一郎訳)、青土社(原著: John Batchelor. The Ainu and
Their Folk-Lore. The Religious Tract Society. London. 1901.)

高槻市教育委員会 1995 『芥川遺跡発掘調査報告書—縄文・弥生集落跡の調査—』

高山市教育委員会 1991 『垣内遺跡発掘調査報告書』

玉田芳英・岡田憲一 2010 「5. 近畿」『西日本の縄文土器 後期』、有限会社真陽社

千葉豊 1989 「縁帯文系土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」『史林』第 72 巻第 6 号、
史学研究会

千葉豊 2008 「縁帯文土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

中沢道彦 2006 「中部地方の原始絵画研究の現状と課題」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

中津川市教育委員会 1985 『岐阜県中津川市阿曾田遺跡発掘調査報告書』

西本豊弘 1991 「縄文時代のシカ・イノシシ狩猟」『古代』第 91 号、早稲田大学考古学会

能登川町教育委員会 1996 『正楽寺遺跡(5次調査)』

久田正弘 2006 「北陸地方の絵画資料」『原始絵画の研究 論考編』、有限会社六一書房

堀沢祐一 2004 「北陸地域の動物意匠について」『考古学ジャーナル』No.515、株式会社ニューサイエンス社

三上徹也 2018 「縄文時代中期・顔面様装飾把手の変遷から水煙把手への変質と背景」『日本考古学』第 45
号、一般社団法人日本考古学協会

宮尾亨 2008 「線描画」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』、株式会社アム・プロモーション

吉本洋子・渡辺誠 1994 「人面・土偶装飾付土器の基礎的研究」『日本考古学』第 1 号、一般社団法人日本考
古学協会

岐阜県文化財保護センター

研 究 紀 要

第5号

2019年6月30日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田洞東 1-26-1